
ジェネラルの男と竜人の娘～戦いの果て～

HATI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジオネラルの男と竜人の娘～戦いの果て～

【Zコード】

Z0576BA

【作者名】

HATTI

【あらすじ】

とあるMMORPGに嵌つて いる男。

カンストしたキャラから切り替えて新しいキャラクターを作成し、育てていた。

起きると見知らぬ場所に放り出され、身体は自分の物ではなく、育てていたキャラクター。

そこから始まつたのは、男にとつて過酷な物語。

与えられた力は天下無双には遙かに遠く、立ちはだかる敵は強大無比。

寄り添うのは竜の血を引いた少女と、仲間達。
彼の戦いが否応無く幕を開けた。

解説1（前書き）

本編中に説明の難しい事柄などを解説させて頂きます。
今回主人公のプレイしていたディエイエスについて簡単に解説します。

読まなくても本編を読む分には特に支障はありません。

ディエスってどんなゲーム？

- ・アクションRPG型のMMO
- ・HP（生命力）／MP（魔力）制
- ・レベル150までのレベル制。職業は作成時から固定。
但し武器やアクセサリーによつては別の職業のスキルが使用できる。

- ・レベルによる上昇ステータスはSTR（筋力）・AGI（敏捷）・INT（知識）・DEX（器用）・VIT（耐久）。
- 職により比率が違う。また上昇幅も多少ランダム性がある。一部のステータスがほぼ上昇しない職も多い。
- ・職業は30種類以上。各職ともメリットデメリットが調整されており、多少比率に違いはあるがどの職もそれなりに人口が居る。
- ・アイテムを必要とする特殊な職業がある。作中のベルギオンの職業である「ジェネラル」もその一つ。
- ・神や魔も上級の敵として登場する。
- ・100後半から装備可能な武器防具のグレードが大きく上がり、150になると職によって単身で神と戦える。
- ・多人数でのプレイヤーVSプレイヤー戦争も活発である。「ジエネラル」は戦争専用職に近い。
- ・プレイヤー数は10万人前後

主人公の作成キャラクター

初期作成キャラ

・LV150（MAX）

- ・名前 ???
- ・職業 ソード・スター（双剣タイプ）
- ・装備 ???

サブキャラクター（本編に使用されているキャラクター）

- ・LV50
 - ・名前 ベルギオン
 - ・職業 ジェネラル（将軍）
 - ・装備
- 武器 バスター・ソード（ミスリルと鋼の合金）
防具 ヘマタイトの防具（鎧や手甲など一式）
アクセサリ ???の指輪

職業の説明

ソード・スター

- ・AGIとSTRの上昇率が高く、DEXとINTも平均並に上昇する。但しVITに関しては平均の半分以下
- ・防具の場合重装備は装備できない。軽装備を装備時、盾を装備しない場合速さに補正が掛かる。
- ・武器は短剣・長剣・片手剣・双剣。投擲用の短剣も装備可能。
- ・他重量が軽い武器も扱う事ができるが、ダメージは低下する。
- ・魔法はバフ（補助）のみ取得する。
- ・対人・対モンスター共に物理攻撃面では最上級。防具をきちんと調えればAGIの高さも合わざり生存率は非常に高い。
- ・極まればソロで神BOSSも狩れる。
- ・スキルは攻撃と回避に集中している。

ジェネラル

- ・STR・DEX・VITが平均より少し高く上昇する。AGIは平均。INTはほぼ上昇しない（スキルにMPを使用しない）
- ・武器防具共に騎士専用の重装備以外を装備できる。
- ・魔法は使用できない（MPがほぼ無い為装備による魔法も不可）
- ・ジェネラル個人の戦闘力は特別高く無い。レベルを150にして装備を完全に固めても同条件のソード・スター等には大きく劣る。
- ・スキルは自軍に対する補正・敵軍に対する逆補正に関するもの殆ど。

初めての大地（前書き）

ファンタジー小説となります。

初めての大地

キーボードを叩く硬質な音が閉め切られた部屋に響く。他にはパソコンのHDDが僅かに煩い程度だ。

10分もしないうちにキーボードを叩く音は静かになり、それを叩いていた男はゆっくりと体重を椅子の背もたれに預けながら、

ペットボトルのお茶に口を付ける。

「今日はここまでにしどくか。またMP回復剤買い込まないと」

昨日あれだけ買い込んだのに、と男は内心溜息を付く。

パソコンの画面には、2年ほど前に始まったMMORPG「ディエス」のプレイ画面と、

彼の操作するキャラクターが移っている。

時刻は既に深夜2時を回っている。

彼は最近派遣の仕事を満了した為、資金に少し余裕がある此処2・3ヶ月はこの「ディエス」の新キャラ育成に費やそうと決めていた。初期のキャラクターが最高レベルになり、装備も質は上限に来てしまっている。

新しく装備を更新してもバリエーションの違いにしかならない。

その初期キャラクターをプレイ中に特殊職業のキーアイテムを手に入れた為、

朝のうちからその特殊職業を作成し育てていた。

その職業は「ジヒネラル」、将軍の職業だ。

MMOでは余り見かけない職で、ソロが主な彼もその日新しさに加え作成に必要なキーアイテムも手に入つたことで作成した。レベルは50ほど。レベル制限ギリギリの装備と回復剤を注ぎ込む事で加速してあるとはいえ、数日で上げたにしては上出来だ。最高レベルの150までは遠いが、ステータスはある程度上がつてきている。

これなら暇な間に100は目指せると男は先ほど落ちた気分を良くし、パソコンを付けたまま布団に入り込む。

明日は次の狩場に行こう。そこは金銭も経験値も悪くないしそう考えながら、男は眠りに落ちていった。

次の日、男の身体はもつそこには無い。

「んあ？」

「なんだ？」

寝転がっている男が陽射しの鋭さに目を覚まし、抜けた声を出す。

カーテンで遮られている筈の直射日光に炙られる事の不快さと、疑問。

そもそも男の背中の感触は慣れ親しんだベットのものではない。

男は身体を起こし、周囲を見る。

地面は草が生い茂つていて、近くには端が此処から見えている小さい湖。

周囲を木々が囲んでいる。

森の中の湖、といった印象だった。

「いや、いややうじやないだろ」

なんでここにいるのか。いやそもそもここは何処？
そんな疑問がぐるぐると男の中で渦を巻くが、夢だと判断し頬を
つねる。

「……痛い」

男の希望は外れ、男は少し迷った後勢い良く後ろに倒れこんだ。

「意味わかんねえし」

こんな景色に見覚えは無い。
それにこんな鎧着込んだ憶えも……

(鎧ー!?)

焦つて身体を起こし、身体のあちこちを見る。

武装している。剣は直ぐ横に置いてあるし、全身に軽装とはいえ
鎧を着ていた。

「こんなもん持つてた憶えも着た憶えもねー　　、おいこれ

まつたく身に覚えが無い事が続いていたが、ふと見た剣、それに

鎧に僅かばかり男は引っかかりを憶えた。

つい最近、つい直前まで見ていた覚えがある。

「ああ、これ「ディエス」の装備、か?」

「『ディエス』の熟練プレイヤーである以上、装備の見た目を見間違ははずが無い。

剣の模様も装飾も、僅かの違いも無く同じだ。

それに気付いた時、男の心臓の鼓動は一気に加速する。それは恐怖と危機感による物だった。

ドッヂドッヂ、そう心臓に急かされる。

急いで湖へ駆け寄り、水面に反映された顔を見る。

「お、俺じゃない……、こいつ、ベルギオンじゃねーか

寝る前まで上げていた自キャラの顔が、紛れも無く水面に映つていた。

数分ほどじつと水面を見つめていたが、しばらくして長い時間を掛けで防具を外し、

ベルギオンは何度か水を救つて顔を洗う。

湖の水は澄んでおり、恐らく煮沸や濾過をしなくても飲めそうだ。

防具を外しかなり楽になつた後、分からないうがらも情報を整理する。

「俺は確かに部屋で寝ていた、よな

一つ、ここには全く見覚えは無い。

一つ、手持ちの物をひとつくり返したところ、金以外は寝る前に持ちキャラ……、

ベルギオンが持っていたものと同じだった。サブだったこともあり大した物は無かつたが。

三つ、意識しないと思いつかせないが、ベルギオンの記憶が断片的にある。それは俺の操作してきた経験とほぼ相違なかった。

分かるのはこの程度だ。

そして、この現実感を否定できる材料は一向に無い。

つまり男はベルギオンで、見知らぬ世界に放り出されたってことになる。

その結論に辿りつき、ベルギオンは頭を抱える。

「嘘だろお……いや嘘じやねえ。意味が分らんぞ」

そう呟いてもこの悪夢から覚める様子は無い。

ベルギオンはガリガリと苛立ちから頭を搔くが一寸思考を切る。

これ以上考えてもどうしようもない袋小路だからだ。

脱いだ鎧や手甲、足の脛当てを取り付ける。

防具のつけ方など分らなかつたが手が憶えているのか、思つたより早く付ける事が出来た。

もしこのままなら現状で生きていいく事になる。

得てして防具、特に鎧は高額なものだ。

レベル制限の関係でレベルにしては良い程度の物だが、金も無い以上多少苦しいという理由で置いて行くわけにもいかない。

そもそも、人間が居るのか？
もし俺しか人間が居ないとすれば

そんな想像をしてしまい冷たく血が凍るような感触が全身を舐めた。

！

「なんだ？」

何か今聞こえたか？

そう思いベルギオンは背後へと振り返る。

そうすると、以前では不可能であつただろう距離まで鮮明に見える。

確かにこの職は命中補正もあつた筈だ。この視力はそれの影響だろうか。

その視力に、モンスターに襲われる少女がハツキリと移った。

僅かにベルギオンは迷つたが、剣を掴み駆け出す。

以前の肉体より遙かに早い動きに意識が付いていかず、こけそうになるが強引に力で傾いた体を振り戻す。

（なんつー身体だよ。明らかに筋肉の量と密度がかつてと違います
（あるいは）

ぐんぐんと距離を詰めていく。少女は逃げているが、モンスターの方が早い。

その上3体が組織立て追いつめている。猶予はほぼない。追いでているのはやけに筋肉の付いた緑色の小人。見た事は無いが、イメージとしては「ゴブリンのやつだ。

ベルギオンはそう判断し、より力を込め速度を増す。

その走る音に少女が気付くほど距離が狭まった時、ベルギオンは軸足となつた右足を蹴り上げ、先頭のモンスターに対し膝蹴りを顔面に決める。

走ってきた速度と蹴り上げた力が合わさり、モンスターの首が縦に180°捻じ曲がる。

「いいつけやつた。そういう手応えだった。

残りは二体。木で作った棍棒をそれぞれ一つ持つている。ベルギオンが僅かに後ろを見ると少女が倒れている。体力の限界のようだ。

勢いで来てしまつたが、喧嘩程度ならまだしも、生死に関わるような戦いの経験は全く無い。

身体能力で遅れを取ることはなさそつだが、走ってきた疲れによる汗とは別の冷たい汗がじわりと額に流れる。

ゴブリン達はいきなり現れて一体屠つた男に戸惑いを感じたものの、ベルギオンの霸氣の薄さに勝機が高いと見たのか武器を構える。見た所、二体一というハンデがあるが、あの棍棒を直撃しなければ戦えそうだ。

しかしベルギオンに複数に囮まれた経験は無い。どうなるか分からぬ。

（先手、取るか……！）

剣を抜き、両手で構える。

握り方は身体が勝手に教えてくれる。

力を込めて、振り上げてから一気に振り下ろす！

重い長剣を振り下ろす事で重い風圧の音が響き、予想以上の力に身体が前に持つていかかる。

剣線上にいたゴブリンは避けようとすると、力を込めて加速のついた剣をかわせず大きく斬れた。

完全に姿勢が崩れたベルギオンの頭を目掛けて、最後のゴブリンが棍棒を振り下ろす。

ベルギオンは咄嗟に地面に突き刺さった剣から手を離し右腕で頭を庇う。

ぐわん、と身体が揺れる。

手甲の防御力が優つたのか、痛みは無いが衝撃で右腕が痺れる。

（くそ、見た目より響くじゃねーかよお……）

頭に受ければ致命傷は免れないだろう。

ゴブリンは氣色の悪い声で笑い、更に棍棒を振り上げる。

「囮にのつてんなよくそ！」

その笑いにベルギオンは不快さが優り、咄嗟に右足で腹を目掛け

て前蹴りを離す。

さつきの一撃で僅かにひるんだ事で完全に油断していたのか、蹴りが綺麗に腹に入った。

「GUGA a a!？」

腹を蹴られ、胃液と悲鳴を撒き散らしゴブリンは一目散に逃げ出した。

ベルギオンは出来れば倒しておきたいと思ったが、初めての戦いで氣力と精神力が疲労したのか、一気に疲れが出てくる。

ベルギオンは座り込んで乱れた息を整える。
何度かの呼吸で呼吸のリズムが戻った。

「つと、そうだ。さつきの女の子は」

完全に忘れていた事に気付いて焦りつつも、ベルギオンは少女に近づく。

金髪、といつよりは茶色の髪の毛。
あどけない寝顔だ。多少汚れはあるが傷などは見当たらず、呼吸も安定している。

素人目には分からないが、問題は無さそうだ。

しかし、余程疲れていたのかすぐには目は醒ましそうに無かつた。
仕方ないので、お姫様抱っこで湖の近くまで連れて行く。

ベルギオンは、人が見つかった事に、目が覚めてから初めての安堵を抱いたのだった。

竜人の村

(小さい獣とかもいたし、森から連れてきて正解だったかな)

ベルギオンは女の子を湖の片隅に降ろし、座り込んで湖の水で喉を潤した。

地下水が通っているのか程よく冷えていて、先ほどの疲れが乾きと共に癒えていく。

森には獣の気配はするが、此方に襲い掛かるような危険なものはないようだ。

(人が居るつて分かつたのが不幸中の幸いかねえ。さっきのモンスター見ると差し引きだけど)

先ほど追い払ったゴブリンは普通の獣より知能があり、そして暴力的だ。

誤つて動物を殺してしまったときの嫌な感じが心に湧いたが、ああしなければ多分女の子を助けられなかつただろう。

ベルギオンは割り切れたわけではないが、そう思う事にした。ああいつた奴らが居るという事は、日本に居た頃よりもずっと気をつけの必要がある。

道端で襲われてしまつのような世界だと思つた方が良いだろつ。

「ゲームならまだしも、これは向いてねえ……」

真つ当に生きてきたベルギオンの価値観は未だ以前に引きずられているが、

大分引いてきた右腕の痺れで戻される。

初めての戦いで生き延びた事よりも、これからを思つてベルギオンは不安に感じた。

「 ん、ん 」

そうしてゐる内に女の子が起きたのか、目が薄つすらと開いていく。

すると勢い良く体を起こし、両手で体を押さえて怯えた顔で左右を見渡す。

襲われる寸前に意識を手放していたから、危機感がまだ強く残つてゐる様子だ。

「落ち着け」

「あ、え、あなたは……、ゴブリン達は！？」

（会話が通じた。内心少し不安だつたんだが）

日本語でどうやら通じるようだ。

異国語だった場合間違いなく面倒な事になつていただろうと考えていた為、

心配事が一つ無くなる。

「あんたを追いかけてきた奴らは追い払つた。少なくとも今は大丈夫だ」

「や、そうですか」

女の子の体から力が抜けた。

そこでようやく俺に意識が向いたのか、姿勢を正して俺に頭を下げる。

しかし、ベルギオンを見る度や体が少し硬い。警戒はされてるの

かもしだれない。

「助けていただいたようありがとうございました。助かりました」「運良く居ただけだ。見殺すのもどうかと思つたしな」「いえ、命の恩人です。何かお礼をさせていただきたいのですが」

（中々義理堅いようだ。いやこれが当たり前ののか？俺も命の恩人がいたら頭が上がらないか）

女の子はしつかりと此方を見据えている。目は髪と同様、鮮やかなブラウンだ。

服は中世的というか。ロングスカートにシャツ、その上にカーディガンを羽織つている。

しかし、ベルギオンは腕を組んで考え込む。お礼と言われても困る。まさか金を巻き上げるわけにもいかないし。

とはいえばつきりいつて今のベルギオンには何もないに等しい。人間が生きるために必要なのは……

「そう言わると悪い気はしないな。

お礼か……すまないが食事と今夜の寝床どうにかならないか」

そう言われた女の子はきょとんとした顔をし、先ほどより盛大に力が抜ける。

もしかしてお礼に体でも求められると思ったのかもしれない。可愛い女の子は好きだが、見た目14そこそこの娘に手を出すほど道を外れてはいない。

「分かりました。そういう事でしたら、うちの村に来ていただければお力になります」

俺が変な男ではないと思つてくれたのか、女の子は大分声に張りがでている。

しかし村か。色々聞くことができるかも知れないな。

「あ、私はラグル・ロティエといいます。ラグルでいいですよ」

「俺は……、ベルギオンだ」

「ベルギオンさんですか」

迷つた末、本来の名前でなくベルギオンと名乗る。

幾つか理由はあつたが、今はこの名前の方がらしいだろつと判断した。

ラグルは名前しか言わなかつた事を少し不思議に思つた様子だつたが、大したことではないと判断したのか失礼しますね、と言つて手や顔を洗う。

ずつと走つていたから様子だし汗が気持ち悪いのだろう。

ここは少し風が強いし、このままここに居たらラグルが風邪を引いてしまうかもしれない。

「何時までもここに居るのもいかんな。少し陽が落ち始めているし落ち着いたら村に行こう」

「分かりました。村へはここから20分くらいで着くと思います」

顔を洗い終わったラグルはそう言つと立ち上がり、此方です。と案内し始める。

見た目は華奢なようだが、しつかりしているようだ。

ベルギオンも立ち上がり、ラグルについて行き森へ入る。森を移動がてら幾つか話をしてみるとしよう。

そういうれば此処がどこかも気になるな。むしろそれを先に気にするべきだった。

「ベルギオンさんは冒険者の方ですか？」

「ん、まあそんな感じか……、どうして？」

「北の大森林でもこの辺りは奥まつていて、余り普通の人間の方はいらっしゃいません。

それに私を襲ってきた三体のゴブリンを追い払えてましたし」

（北の大森林……、聞いたことはないな。この世界はディエスではないのか？）

「ちょっと待つてくれ。ここは北の大森林つていうのか？」

「？ ええ、そうですよ。ご存知無いんですか？」

「あー、えーと、田舎の方から出てきてね。全然詳しくないんだ」

「それは……、知識無しでこの森に入るのは危険です。

普段なら危険なモンスターは居ませんが遭難してしまいます」

と、ラグルは少し怒ったような顔をしてベルギオンに忠告する。

「あ、ああすまんな。あー少し聞きたいんだが、

クラッグスやペルペイトって国を聞いたことはあるかな」

クラッグス、ペルペイトはディエスの中でも大きい国だ。

ここがディエスの世界なら知らないという事は無いだろう。

ベルギオンは内心そう思いながら、心を必死に落ち着かせながら答えを待つ。

「えっと、すみません。どちらも聞いた事は無いです。

この辺りで一番大きい国はティレ王国ですね」

「 ッ

それを聴いた瞬間、

心の何処かが捻じ曲がるような負荷をベルギオンは味わう。

（まだ、まだディエスの世界なら知識で何とかできた！）

ベルギオンは僅かだが、此処がディエスの世界ではと期待していた部分があつた。

しかし、ティレ王国などといつ国は無いし、ある筈の国は無いと
いう。

口の中に苦々しい思いをベルギオンは感じていた。

「……そうか、いや大したことじゃない。そうだ。

さつき普通の人間つて言つてたけど、人間以外にも来たりするの
か」

そんな事も知らないんですか、と言いたげな少し冷たい視線がラ
グルからベルギオンに浴びせられる。

その視線に耐性の無かつたベルギオンは少しだけ竦む。

「そうですか。えっと、北の大森林はエルフ族やドワーフ族、
それに私達竜人族や他にも亜人族達が主に暮らしているんです。
住んでいる場所は種族毎に分かれていますけど」

「竜人……俺には普通に見えるけど」

それに竜人という言葉は始めて聞いた。

どういう種族なのか気になる。

そう言つとラグルは少しだけ悲しげな顔をしてしまう。悪い事を
きいたか。

長老に竜人について聞いてみる方が良いかも知れないな。

「血が薄いので。夜目が利く程度です。濃い血を受け継ぐ人はもう殆ど居なくなつてしまつて」

「なるほど」

「この辺りは余り危険な獣やモンスターは居ないので、今まで問題はなかつたんです。でも最近ゴブリン達が住み着くようになつて……」

亜人族。ゲームやアニメなら良く見かけていたが、実際に居るようだ。

イメージは湧くが、実際にあつてみないと何ともいえない。ただエルフは綺麗なイメージで描かれる事が多い。一目見てみてみたい。

「あいつ等が出てくるようになったのは最近か」

「はい。長老はロードゴブリンが来ているかもしぬないと「ロードか。そりやまずいな」

ロードってなんだ。と思つたが有名な言葉かも知れない。冒険者で通した以上聞くのもまずいだろうか。

会話の流れから多分かなり強いゴブリンだろう。

「姉が討伐に出ようとしたんですが皆に止められてしまつて」「そりや凄い姉ちゃんだな。ただあいつ等は群れてるし一人じゃ無理だろ。

止めて正解だよ。しかしそうするとラグルが襲われたつてのはまずいな」

「はい。始めは農作物が荒らされたりする程度だったんですが、数が増えてきたのか最近過激になつてきて。でも襲われたのは初

めてですか

追われた恐怖を思い出しのか、少しラグルは身を振るわせる。そのラグルの頭に手を載せ、何度もやわしく叩いてやる。

(甥っ子はこれで笑顔になつたもんだが)

「や、やめて下さい！ 恥ずかしいです」

とラグルに怒られてしまひ。

内心少ししょんぼりした。まあ女の子の頭を気安く触る物でもないか。

しかし元気は出たようで、なによりだ。

その表情を見て、ベルギオンは心の動搖が収まつていいくを感じた。

諦めるのはまだまだ早いだらう。遭難も防げた事だし。

「見えてきましたよ」

ラグルに言われてベルギオンは正面を向くと、森を広く切り開いて出来た町が見えてくる。

森の中で作つたにしては中々大きい。少しずつ切り開いてきたのだろう。

家は木で出来てる。それに畠等も手入れされていた。

先ほど川もあつたし、人里から遠いみたいだが住むだけなら大変だが悪くない場所なのだらう。

「先に長老の家に案内しますね」

「頼んだ」

ラグルに続いて町を歩く。

余所者のベルギオンにどう反応するのか気になつたが、ラグルが居るからか多少じろじろと見られるものの変な視線は感じなかつた。

「ノノです。長老、いらっしゃいますか」

ラグルはそう言って一回り大きい家のドアを何度もノックする。

「あいとるだ」

少ししづがれた声が中から聞こえてくる。

ラグルはドアを開けて、ベルギオンを中へと促した。

「失礼します」

「失礼」

中に入ると、材料は竹や木ばかりだが見事な家具が幾つも置かれている。

そこに白い髪を伸ばした男の老人が椅子に座つて茶を飲んでいた。

「どうしたラグル。それに其方の男は誰かの」

ジロリと、長老に見据えられる。

この眼、まるで観察されているようだ。

少し瘤に障つたが、村の若い娘が誰かも分からぬ男を連れてきたんだ。

その位はされるものかとベルギオンは勝手に納得する。

「薬草を摘みに湖の近くへ行つてきたんですが、そこでゴブリン達

に襲われて……、

このベルギオンさんに危ない所を助けて貰いました」

それを聞いた長老は先ほどの態度を会釈で謝る。

「おお、それはラグルが世話になりましたな。しかしゴブリン共、
どうとう我らを襲い始めたか。

ラグル、お前は一度家に戻りキリアに無事を伝えてきなさい。
ベルギオン殿と少し話がしたいので」

「分かりました。ベルギオンさんは食事をしたいと言つてましたので
その用意もしてきます」

「構わん。芋を煮たやつがあるのでこっちで食事を振舞うとしよう。
構わんかなベルギオン殿」

そう意見を振られ、ベルギオンは反射的に頷いてしまつ。
とりあえず食事は食べれるようだ。

そうしてラグルは家へ戻り、長老は鍋の置いてある竈に火をつけ
てベルギオンに茶を振舞う。

「たいした物はないがの」

「いえ、朝から何も食べていなかつたので助かります」

「ずずつと、茶を啜る。

何かの葉っぱを干した物だらう。

すこし渋みはあつたが美味しく飲める。

「さて、まずはラグルを助けていたいた事、感謝に堪えませぬ」
「いえ、運が良かつただけです。襲つていたやつらもやばいモ
ンスターでもなかつたし」

「それでもベルギオン殿が居なければ命が危うかつたようだ。さて、今日は宿の当てはあるのですかな」

「恥かしながら全く」

「ではラグルの家の隣に小屋があつた筈。それを使うといい。キリアにも伝えておきましょう」

「キリア？」

「おお、これは失礼。ラグルの姉で家長のキリア・ロティエの事です」

「そうでしたか。屋根のある所なら問題ありません」

シーツなんかはあるみたいだし、野宿よりは全然良さそうだ。

(野宿なんて経験も無いしな)

旅人は珍しいのか、長老は他にも幾つか上機嫌で話を振つてくる。少しでも情報が欲しいベルギオンにはそれは願つても無い事だ。年寄りの長話に感謝するときが来るとは思わなかつたが。

「ベルギオン殿は冒険者の方ですか？ 商人でも中々此方には来ませんし」

「ええ、旅をしながら移動しています。ただ森で道に迷つたようで大分深い所まできてしまつたみたいです」

「なるほどのう。今は刈り入れ時で人手がおりませんが、手が空いたら道案内をつけましょう」

「良いのですか？ 案内人も帰り道が危険では」

「キリアに頼みましょう。彼女なら多少のゴブリンは物ともしません。

大した礼にはなりませんがそれまでは逗留すると良いでしょう」

それは願つても無い相談だ。

金もないし、何をするにもある程度人のいる大きい町に行きたいと考えていた。

森を抜けねば道くらいはあるだろうし、次の指針になる。

ベルギオンはそう考えて、是非とも御願いします。と頭を下げた。

「おや、スープも温まつたようですね。お注ぎしましょう」「御馳走になります」

出されたスープには大きく切った芋が幾つも入っており、付け合せに硬く焼かれた白パンが出された。

こういう村では食料は貴重な筈だ。味わって頂こう。

温かいスープは塩が利いており、パンもスープに漬けるとふやけて食べやすくなる。

自分で思っていたより腹が減っていたのか、ベルギオンはガツガツとスープを平らげてしまう。

満ち足りた気分だった。

「御代わりはいりますかな。ああ遠慮はいりませんぞ。芋は掘れま
すし塩は海が近いので安く手に入ります」

「すみません。ではもう一杯だけ」

よそつて貰つたスープを、先ほどより味わつて食べる。

暖かい。今此処に生きている感覚を、ようやく味わえた気がした。

竜人の簡単な歴史、そして悪い状況

芋は無い。芋に味は無いが、スープの塩が効いていてホクホクしていた。

「さて、満足戴けたようですね」

「ええ、ご馳走様です。美味しかつたです」

長老は勢い良く食べたベルギオンに気を良くしたのか、上機嫌だ。しかし大分歳をとつていてるだろうに、かくしゃくとした老人である。

食器を重ねて水場へと持つていく。

「おお、すみませんな」

「いえ」

再び席に座り、渋みのある茶をすする。

落ち着いた雰囲気だ。聞くなら今かとベルギオンは判断する。

「少し聞きたいことがあるのですが」

「なんですかな？ 答えられる事でしたらなんでもどうぞ」

「はい。私は田舎の方から出てきましてね、いまいち地理が分からぬのです。

地図があれば見せて欲しいのですが

「なるほど、そういうえば準備無しに北の大森林に来て迷われたのでしたな。

余り広い範囲ではありませんが、地図は奥にしまって有りますので探しておきましょう。

直ぐ見つかると思います。その時は連絡しますよ

その親切に、思わずベルギオンは頭を下げた。

「ありがとうございます。助かります。あともう一つ、

良ければいいんですが、竜人に付いて教えてもらえませんか？」

「良いですぞ。今となつては有名な部族では有りませんが、隠すようなことも有りませんのではな」

そう言うと長老はパイプを取り出し、かまわんですかな？ と聞いて了承すると火を付け一息吸う。

「始まりは聖年1年、今から800年ほど遡ります。この辺は神話として伝えられてるので省きますぞ。

もし興味があれば街で本を読むのも良いかもしだせんな

そう言つて長老は竜人の歴史を語り始める。

(歴史もいざれ調べる必要があるか)

「当時は魔物の数はとてもなく多く、この大陸を支配していくと言われています。

そこで数少ない抵抗勢力が竜だったのです

「竜？ 竜人では無くて？」

「ええ。当時の竜は今大陸に居るモンスターの龍とは違い、高い知能と莫大な魔力を持っていたと言われております。

数は少なかつたが、魔物もおいそれと手が出なかつたとか。

それでも少しづつ押されておりましたが、そこで聖魔大戦が始まります」

聖魔大戦？ その言葉にベルギオンは頭を傾げる。

聞いてみたいが、紀元元年で起こったって事はかなり有名だろ？

（本もあるらしいし、ここで聞くより自分で調べてみるか）

「この戦いは有名なのでしつておりますかな？ そこでこの戦いで魔物を一度この大陸から滅ぼしましたが、

その戦いで竜は絶滅の危機に瀕します。

聖魔大戦の折地上に降りて人々と共に戦った神は、魔物との戦いで武勇を振るつた竜が居なくなる事を惜しみ、

人と交われるように竜を人へと変えたといいます

「それは……なんというか、御伽噺のような話ですね」

「そう言われるのも仕方ないですか。ワシも全てを信じているわけでは有りませんが、代々伝わってきましての。

その当時の竜人は竜であつた頃と変わらないほど強く、また人となつた事でより知恵をつけたといいます

しかし、人と交わる事は出来ても、血が合わなかつたのか子供も

出来にくく、生まれた子供は親の竜人より大分弱かつたと言います

「血が……、ではこのような奥に住んでいるのは」

「ええ、血を守る為でも有ります。もはや人と変わらなくなるほど薄くなつてしましましたがな。

寿命も人と変わりません。それに初代の竜人は空白の100年の間に亡くなつてしまつたと伝えられております。

彼らは純粋な竜でしたから、もしかしたら生きていたら今でも居たのかかもしれませんな」

「竜は偉大な先祖なんですね」

「ええ。今の時代で濃い血をもつたキリアは竜を特に尊敬しております。無論、ワシ等も」

「ですか。話して頂きありがとうございます」

空白の100年。戦いの後に何が起つたようだ。

(しかし、血は薄くなつたといつても大分歴史のある一族なんだな)

長老も、どこか誇らしそうに見える。

それだけに、血が薄くなつていくのは悔しいのかもしれないべルギオンは思った。

何か声をかけようとするも、良い言葉は思い浮かばず、止む無くベルギオンは別の話題を尋ねる。

「そういえば、ロードゴブリンが近くに住み着いたとか」

「ラグルに聞きましたか。一月ほど前からゴブリンの姿を見るようになりましたか。」

「ゴブリン自体が群れで来ることは、決して珍しい事ではないのですが。どうにも巣穴の大きさが違うのです」

巣穴の大きさといふと群れの数が違うのか、それとも大きい個体でも居るのかも知れない。

「大きい個体がいるかも知れない」と

「ええそうです。数もどうやら多い。繁殖力が強いにしても多すぎること程の数を引き連れているとなると」

「それでロードゴブリンが居ると」

そのベルギオンの言葉に、茶で喉を潤しながら長老は頷く。

「見たわけではありませんが。ほぼ確実だと思われますな。それ以上のランクであれば一ヶ月も待ちますまい」

「私はロードゴブリンを良く知らないのですが強いのですか? キリア……さんが討伐に出ようとして止められたとか」

「ええ、若い衆に止めさせました。ゴブリン種の中では中の下位ですか。」

「一対一ならキリアなら討てる可能性は有りますが……、ゴブリンの長はその群れの中で強い個体を護衛として引き連れておりましてな」

「確かに、キリアさん以外は血が薄いのでしたか。それは厳しいですね」

「キリアは確かに魔法も使え腕つ節もありますが、情けない事に他のワシ等は普通の人間とそう差はないのです。本來ならこういう時、エルフの部隊に救援を求めるのですが」

竜人に付いて詳しく知りたかったが、きな臭い話になってしまった。

「それなら今回も」

「そう思い伝令を若い者に行かせましたが……、エルフの街の近くにゲヒル・オーガの群れが出たようでそちらに手を取られております」

「エルフの街に」

「エルフの部隊は精強での。ゲヒル・オーガの群れでも落ちる事は無いですが、半月は動けないと返答が来ましてな

「では他の」

その言葉に長老は首を振る。様子に疲れが見えた。

「遠すぎるのです。竜人は元々交流は薄く、離れて住んでおります。交流のあるエルフの街でも近いとはいませんでな」

「そうですか……、ではどうされる御積りで」

「討伐の為の冒険者を呼ばうにも金も無く、必要な人数の居るグループは北の大森林の奥には来ようとしません。」

広いだけの森で得る物もありませんし、うつかり集落に入り込む
こめば好戦的な亜人もおりますからな」

「……」

「おお、つまらん話をしまいましたな。
何、武器くらい備えております。ワシ等も竜に連なる物としてそ
う軽々とはやられませんよ。」

「ですか」

かなり悪い状況ではないだろ？

協力相手の救援は無い、冒険者も呼び込めない。
まともに戦えるのは腕が立つとはいえ、女一人
ベルギオンは嫌な味のする唾を飲み込む。
少しの間沈黙が流れ、ドアから控えめなノックが聞こえる。

「失礼します。姉に伝えてきましたので、戻ってきました」

そう言つて姿を現したのはラグルだった。
汚れていた髪や肌は綺麗になり汚れた服を着替え、動きやすい薄
着になつている。

「おおラグル、来たか。ベルギオン殿には刈り入れが終わるまで逗
留してもらうことになつたでの」

「あ、そなんですか？ そうか、今道案内が出来るのは姉だけで
手が空いてないからですか」

逗留という言葉を聞いて、ラグルは少し笑顔になる。

旅人が来るのも珍しいだらうし、話でも聞いてみたいのかもしれ
ない。

「うむ。ワシが後で伝えてもいいが、ラグルが言つておくかの？」

「そうですね。私がいらっしゃっておきます。あれ、ビリヒ泊まる事になつたんですか？」

「確かに隣の小屋、今あいとるな？ そこにベルギオン殿に使つてもらおうかと思つての」

「あの小屋ですか？ 確かに空いてますが、余り掃除もしてませんし……」

「構わんよ。屋根と、あと体に掛ける布か毛布があれば」

ラグルは小屋に止める事を想定してなかつたのかいまいち乗り気ではない様子だが、

ベルギオンとしては一先ずの宿が確保できた時点で良しとした。

場合によつては洞穴を探して、そこで寝たり野宿の可能性もあつた事を考えればなあらうである。

「ベルギオンさんがそういうのであれば、寝る所はありますけど、物置小屋として使う事もあるので本当に綺麗じゃないですよ？」

「それほどか。なら簞があれば貸してくれ」

はあ、仕方ないですね。とラグルはため息をつく。ハキハキと言う子だな。

しかし、先ほど長老とベルギオンの中で漂つていた少し暗い空気は完全に無くなつてゐる。
それは間違いなくラグルによるものだつた。

「分かりました。姉も感謝していますし問題は無いと思います。長老も言つてましたと伝えますので。話は終わつたんですか？」「ええと、大体は終わりました、かね？」
「ですか。逗留されるのですからまた話す機会もあつましょう」「ええ、是非とも御願いします」

「では私に付いてきてください。家まで案内します」

そう言つたラグルにベルギオンは付いていき、家の外へと出る。話を聞く中で、ベルギオンの心の中である思いが生まれ始めていた。

長老の家から5分ほど歩いた所で、木で出来た家と小さめの小屋が隣合つている場所に付いた。

「（）」が私と姉の家です。父や母は既に天に召されてるので一人で住んで居ます

「それは……苦労しだらう」

「姉も居ましたし、竜人の村は皆仲が良いのでなんとかなつてます。畑も姉は力があるので維持できますし」

「そうか」

「ではどうぞ。姉に紹介もしなければいけませんね」

自分から言つたという事は本当に氣にしてないのだらう。しかし村の助けがあるとはいえた女性一人で生きていくのは大変だらう。

（逗留をせてもう少しひ間何か手伝つのもいいかも知れないな）

ベルギオンは密かにそう決心する。

「どうしましたか？ 遠慮しなくても良いですよ」

ベルギオンの足が止まつているのを不思議に思つたのか、ラグル

が声をかけてくる。

「悪い。今行く」

ベルギオンはそう言つて家中に入る。

入った部屋には、入り口横にラグルが控えていて、真ん中に女性が一人立っている。

ベルギオンは、その女性の存在感に目を奪われる。

赤く胸まで伸びた艶のある髪。

強い意志を思わせるやや釣りあがった眉。

赤く凜とした目。

服は動きやすいハーフズボンに、絹のシャツと動物の皮をなめて作ったと思われるジャケットを着ている。

胸は大きい、と言つほどではないが細い腰と、相俟つてそれなりにある。

歳は18ほどだろう。肌に張りがある。

妹のラグルはまさに村娘といった感じだったが、

逆に姉のキリアはかなり活発な狩人のような印象を与える。

何よりも、存在感が違う。竜人の濃い血のなせる業か。

女性は入ってきたベルギオンに近づき、口を開く。

「キリア・ロティエよ。妹が世話になつたね、礼を言つわ。確かベルギオンだつた?」

「ああ合つてゐる。巡り合わせが良かつたようだ。俺もあのままだと遭難していいたし」

そういうつてキリアは握手を求めてくる。

ベルギオンは女性の手にて少しだギマギしたものの、握り返した。中々気の強いようだ。しかし話しゃやすい。

ベルギオンもそれに合わせ、緊張していた気を少し緩める。

「姉さん。長老が隣の小屋をベルギオンさんに寝床として使わせて欲しいそうです」

「小屋ね。確かに他に空いている家は今は無い。ベルギオンは構わないの？」

「その質問は三度目だ。全然問題ない」

「なら使うといいわ。掃除の為の道具は貸す。私達の小屋だし私達も手伝つ

「助かる

「では道具を取つてきますね」

そう言つてラグルは奥へと引っ込んだ。

とりあえず、世話になる場所を掃除しよう。

湯浴み

小屋は寝るには十分な広さだった。

大の人が二人は十分寝そべれる。

小物は端に寄せて、借りた簾でゴミを外へ吐き出す。

ゴミといつても埃ばかりだ。合間合間で手入れされていたのか、それも少ない。

キリアが水を持ってきて、ラグルが掃いた場所を拭く。木で出来た内装は見る見る本来の輝きを取り戻していった。

「こんなものか？」

「大分綺麗になりましたね。後で寝具を持ってきておきます」

ラグルもこれなら問題ないのか、ベルギオンの言葉に頷く。

「終わった？ 綺麗になつたねー、とはいえ小屋には何も無いわ。寝るまではこっちにいると良い」

「いいのか？ 女所帯だろう」

ベルギオンがそう言つと、ラグルがジト目でベルギオンを見る。

「疚しい気持ちもあるんですか？」

「いや、無いがしかし……」

「さつさと来なさい」

そういうてキリアは手招きした。

相手が気にしてないのに言つのもやまか、とベルギオンは判断し

一人の家に入る。

改めて家に入つて中を見る。

余分な物が無く質素ではあるが、生活するのに必要な家具は揃っている。

見た所寝室と思われる部屋以外は一つになつていた。

炊事場は端に置かれている。家もそう大きくないし広く使う為の工夫だろう。

そこで薬缶が火にかけられていた。

真ん中には丸いテーブルにシーツが掛けられ、木で出来た杯と急須が置かれている。

竈で火にかけるもの以外は木や竹が多く使われていた。

材質としても悪くないし、周囲に幾らでも材料があるのでからそれも当然の判断だろう。

ベルギオンはそんな事を考えながら、ラグルの引いた椅子に座る。

「茶を入れる湯は沸かしている最中よ。 そうだ、少し移動すれば小さいけど湯浴みも出来るわ」

「湯浴みか、いいな」

そういえばラグルも綺麗になつていた。

ラグルの家に風呂がある様子は無かつたので、水で拭いたのかと思つたが。

ベルギオンがそう思つていると視線がつい向いてしまつたのか、ラグルと目が合う。

じつ、と強い視線が来た。

「何か変な想像してませんか?」

「まさか。案内してくれ」

「いいですよ。使う人で順番にしていて混浴ではありますんが」「どこから混浴が。いや、入れるだけで十分だ」

そういえば風呂の事は頭から抜けていた。

ベルギオンは毎日入っていたのだ。入れるなら入つてさっぱりと汗を流したい。

「そうね。話をしようと思つていたけど、その後でいいか。湯を拭く布はあるの?」

キリアにそう言われ、ベルギオンは腰に括りつけていた布袋を漁る。

(確か中に……あつた)

ベルギオンは布袋から絹の布を取り出す。

装備の材料だが、体を拭く布として十分使えるだろ。

それに女性の使つていたものを使つ勇気も、ベルギオンには無かつた。

「これを使うぞ

布は上品な天然の絹で編まれており、キリアはそれを手ぬぐいにするといつたベルギオンに、やや呆気に取られる。

「上等な布ね。勿体無いよくな氣もするけど、まあいいか。

じゃあラグル、案内して上げなさい。今の時間ならまだ人も入つてないでしょ」

「分かりました。邪魔になるので装備なんかは外して置いて下さい」

「ああ」

ラグルの言葉に従い、ベルギオンは手甲や鎧などを外し始める。装備を外す不安が無いでもなかつたが、モンスターが居る訳でもないので不安を追い払う。

やや手間取るもの、装備を外し終え家の片隅に押し込む。

「じゃ、さっぱりしてきなさい。その間に寝る準備だけラグルがしておくれから」

「姉さん……私がすると言つたのでいいですけど」

「ええつと、うん。頼むわ」

キリアは座つたままひらひらと手を振つて見送る。

やや慌ただしくなつたが、湯浴みが出来るとなると今まで気にならなかつた汗や埃が不快になる。

人間とは現金な物だとベルギオンは少し可笑しくなつた。

「どうしました？」

「なんでもない。本当に仲がいいんだな」

「そうですね。姉さんはいざとこう時頼れますし、よく気に掛けてくれます。

あれでいい加減な部分もあるのでつい私も世話を焼いてますし」

「お互い上手く支えあつているんだな」

「はい。……それにしても、凄い傷ですね」

薄着になり露になつたベルギオンの腕の傷を見て、ラグルはそう言った。

少女が見るにはきついだらう、えぐい古傷もある。

ベルギオン自身には痛みも無いしその傷の自覚は無いが、ゲームとはいえかなり無茶な戦い方でレベルを上げていた。

その断片がベルギオンの体に残ったのかもしれない。

「少し無茶をしていた時期があつてな。特に支障のある傷は無いし見た目だけだ」

「そうですか。命あつてのことです。余り無茶はしないで下さいね」「分かつてるとよ」

そこで会話が途切れる。悪い雰囲気ではない沈黙のまま、少しして目的の場所に着いた。

地面に100m程度の小さい川が通つており、その上に小屋が建つていた。先ほどの小屋より少し大きい。川の片方からは湯気が出ている。

「ここです。他に人は居ませんね。

水は流れていますし、魔法石で熱を維持しているのそのまま入つて大丈夫ですよ。

赤く光つてある石がそうですから、触らないようにして下さいね。危ないです」

「魔法石？」

「精霊が宿つている石です。興味有りますか？」

聞いた事の無い物が又一つ増えた。後で聞くとして、今は風呂に入りたい。

「ああ。気になるが後で聞く。それにしても直ぐは入れるのか、ありがたい」

「出たらこの札を裏返しに。帰り道は大丈夫ですか？」

ラグルはそいつて湯浴み小屋の札をひっくり返す。

「覚えたから平気だ。出たら家に向かうよ
「では」

そう言つてラグルは頭を下げて、岐路に着いた。
それをベルギオンは見届け、小屋へと入る。

小屋には湯気が充満しており、扉を開けた瞬間湯気がベルギオン
を通り抜けた。

温かい風にベルギオンはこれは期待できる、と喜ぶ。

脇に脱衣籠がある。床は木だが、真ん中の地面に穴が丸く掘つて
あり、石で舗装されている。

そこに小さい川から流れてきた水が入り込むようになつており、
溢れた分が反対側へ流れ込む擬似的な温泉のような感じになつてい
た。

本来ならこれでは水浴びになるところだが、舗装されている一部
に赤い石が組み込まれており、見た所それが入つてきた水を温めて
いる。

これなら水は常に循環して汚れも余り溜まらないだひつ。

「便利なもんだな」

思わずベルギオンは感心する。しかし、ディエスの世界にこのよ
うな物は存在しない。

その事に僅かばかりのショックも受けた。

見た所石鹼等は無い。自分で用意するのが決まりなのだろう。
ラグルからは仄かに石鹼の匂いがしたので存在はしてる筈だ。

お湯で流せば汗の汚れはすぐ取れるので、ベルギオンは服を脱い
で脱衣籠に入れて、絹の布をその上に置く。

そして、恐る恐るベルギオンは湯の中に身を沈めていく。思ったより深く掘つてあり、石に触れないようこ座ると胸へらいまで浸かれる。

「染みるなあ ！」

少し熱いくらいの温度がベルギオンの肌を刺激する。その染み込む様な感覚に思わず気が緩んだ。

湯に浸かりながら、この世界に来る前を思い出す。MMORPG以外、生きる糧とも言つべき物が無かつた時。つい昨日までそうであったのに、どうにも遠くに感じているベルギオンは感じた。

（……戻れるのか？ 戻りたいのか？）

親も居らず、未練とも言つべき物は何か無いと思つも、存外思い浮かばない。

さりとてこの世界で生きる決心はまだ欠片も無かつた。まだ心の何処かでこれは夢なんだ、と思っている部分がベルギオンにはある。

（湯に浸かって、何も考えずこの熱に身を任せようつ

思考がループしそうになつた事に気付き、ベルギオンは目を瞑つて温泉の心地よい熱を楽しむ事にした。

「行つたかな」

キリアは椅子の背もたれを前面に持ってきて、そこに体を預ける。脱力して、ジャケットがずり落ちかけ、髪は無造作に体に流れる。黙つていれば冷たい綺麗さを持っていた姿は、そのけだるい格好で大分柔らかくなる。

ベルギオンという冒険者はどのような男か、妹に話を聞いて一度見てみたかった。

無論ラグルを助けてもらつた礼を言いたかったもあるが。如何に北の大森林が強いモンスターがいない地域とはいえ、一人で来るというのは奇妙な話だ。

それに準備も無く遭難しかけていたという。冒険者としてはお粗末に過ぎた。

そもそも、今の時期エルフの街の方にはゲイル・オーガの群れが来ている。

エルフの街は近くの町と交流があるし、その噂は広まっている筈だ。

此方のゴブリンの群れがいる事は知らなくとも、一人で行動するのは賢いとは言えない。

どちらも冒険者ギルドに依頼は通つていないから依頼金目当てというのも無いだろう。

そんな時に竜人の村の近くまで来るだらうか？

しかし、ゴブリン三体を軽く蹴散らした事から見て多少腕に覚えはあると見ていい。

置いていった装備も決して安物ではない。質の良い一級品位はある。

キリアはベルギオンという冒険者を計りかねていた。

もしかすれば、追い詰められてきている現状を覆せるかもしだい。

だが、場合によれば巻き込んで共倒れもありえた。

恩人にそのような事をしたとなれば竜人の名折れだ。

そのような事をキリアが考へていると、ラグルが家に戻つてくる。

「お帰り。」苦勞様「

「戻りました。顔も緩んで嬉しそうでしたよ」

「湯飲みが出来るほどの火の魔法石はあんまりないし、というか火の魔法石をあんな使い方してゐるのうちの村位だらうね。

普通は火で沸かすから贅沢だし。湯飲みは出来ないと思つてたんじゃないかな」

「身なりは割と綺麗にされてましたし、感心しました」

聞く話では冒険者は中堅位まではジリ貧かマイナスだ。

身綺麗にする余裕など無いだろう。女ならまだ氣を使うだらうけど。

「

「どうか姉さん、その姿勢はだらしないので止めて下さい」

「えー、いいじゃない。楽だし。ねえラグル、貴方はベルギオン。どう思つ?」

戻ってきて早々寝室の奥からシーツを取り出して来る、勤勉なラグルにキリアは問いかける。

「悪い人ではないと思います。命のお礼をと言つたら普通お金とか、その……、口ホン。特に考えず食事と寝床がほしいと言つような人

でしたし

「目もなんていうかギラ、ギラしてなかつたね。遭難しかけてたみた
いで余裕があるってほどじやなかつたけど」

「それに私達竜人の事を聞いても、興味は持つても視線は変わりま
せんでした」

「亜人と言つても私達は見た目一緒だからね。まあ変な目で見てく
る奴も居たけど」

その直ぐ後に地面に転がしてたけどね。とキリアは内心舌を出す。

「胆力有りそuddash;。力、貸してもらいたいな

「姉さん、それは」

村の近くに住み着いたロード、ゴブリンとその取り巻き達。
普通のゴブリンも50は超えていると見ていい。

3匹のゴブリンを追い払うのとは訳が違う。

此方の都合で巻き込んでいいのか、僅かな非難と不安の混じった
目でラグルはキリアを見つめる。

(私や他の皆で片が付くなならそれがベストなんだけどねー、ゴブリ
ンはそこそこ知恵があるといつても、獸と比較しての話。
もし負ければ男は餌に、女は慰み者にされて繁殖の為の苗床にさ
れてしまうかもしね。それで生きていても使い物にならなくな
れば同じだ)

交渉の通じない相手である以上、竜人の村には勝つしか手段は残
されていなかつた。

美人とぶらり酒

ベルギオンは石で出来た風呂から上がり、体を拭く。

汗も疲れも綺麗に流れ去つており、気分もかなり楽になった。

布袋に予備の服代わりになる装備が何着かあつたので、それに着替える。

残念ながら、布袋にある装備はそれと唯のナイフが一本あるだけだ。

後は回復アイテムが少しど、筋力を一時的にドーピング出来る薬が残り一回分。

準備を整えて湯浴み小屋から出る。絹の手ぬぐいは濡れでいるため、肩に下げておく。

ベルギオンはそのまま行きそつになるが、札に付いて言われていた事を思い出し裏返した。

「よし」

そして気分良く歩き始める。

足取りは少し軽くなつていた。汗を流した爽快さが、そのまま不安も押し流したかのようだ。

空は青と紅が混じりあい、夕方から夜へと変化を始めている。

途中で見かけた村人たちは村長から話を聞いたのか、気安く声をかけてくれたので手を上げて挨拶を返した。

そういえば、と布袋から回復アイテムであるポーションの入った瓶を取り出す。

薄つすりと青く透き通った液体は、紅い陽の光に当てられて皿を奪われるような美しさを醸し出していた。

「効くのかね。これ

揺らしてみると、とぷとぷと液体の揺れる音がする。

余り手元に無いことは言え、コレが使い物になるかどうかはかなり重要なだ。

この世界に売つていればいいのだが。と考えるが、金が無い事を同時に思い出し、ベルギオンは渋い顔になる。

ゲームの世界のようにNPCが販売しているわけはないだらうし、もしもあるなら必需品として高く取引されているかもしれない。

「試してみるか。ちょっとだけ」

その場でやるひとしたが、余りにも特異な状況に見えることに気が付き、森の近くまで歩いていく。

そしてようやくナイフを取り出し、右手の人差し指の上で軽く引いた。

「痛つ」

少し深く切つてしまつたのか、血が溢れてきて鋭く痛む。

その人差し指に、蓋を開けたポーションをゆっくりと垂らしていく。

数滴ほどが傷口に落ちると少しづつだが血が止まり、痛みが和らぎ始めた。

量を少し追加すると、傷口がみるみる塞がっていく。

「使えるな。一度に使えば多少切られても直せそうだ」

ポーションの瓶一つでベルギオンのHPを1割ほど回復できた筈だ。

手元にあるのは5本。実際体をどの程度直せるのかは分わからないが、

単純計算で半分のHPを回復できるのだ。切られても腕の一本は生えてくるかもしれない。

（何だよ腕一本って）

その考えに至ったベルギオンは自分の思考に笑いをこぼす。まだまだゲームとしての思考が強いのだろう。

実際に切られれば笑えないだろうが。

ベルギオンはポーションを割れないように布で包んで布袋に入れる。

今最も頼れる物の一つだらう。大切にしなければ。

そう考へながらベルギオンは一人の姉妹のいる家へと向かつた。

扉をノックすると入っていいよ、といつキリアの返事が来たので扉を開く。

テーブルを囲んだ椅子にキリアが座つており、ラグルの姿は無かつた。

「ノックはしなくていい。自分の家だと思つて使つていいよ

「分かつた、とはいえ客だ。そこまで厚かましくするつもりは無い」

ありがたい言葉だつたが、ベルギオンはその言葉をそのまま受け

取るほど団太くは無かつた。

「固いわね。なら好きにしなさい」

「ラグルは？ あーっと、キリアさん？」

どう呼んだものか悩み、無難だと思われるさん付けをしてキリアを呼ぶと、キリアに睨まれる。

「やめてよ、さんとか。鳥肌立つたじやない。こつちは呼び捨てにしているしキリアでいいよ。ラグルはもう寝てる。

「気を張つて何時も通りにしてたみたいだけど、疲れていたんでしょうね。横になつたら直ぐ寝たわ」

「そうか。まだ子供だし怖かっただろうしな」

「割と器量はいいし大人びてると思うけど、子供扱い？」

「？ 子供だら？」

「あの子あと一年もすれば嫁に行く年頃なんだけど」「えらく若い頃に……、こつちの居た処が遅いだけか

確かに日本も昔は男は16までに元服して、近い歳の嫁をとつていた。

以前聞いた話では体が出来始めた頃に早く結婚する事で、家を継ぐ子供を儲けさせる為だったという。

この村では医者も村人だろうし、子供も出来にくから尚更早く結婚する事が大事なのだろう。

「とはいえ、俺には子供にしか映らんな。顔立ちは整つていると思うが」

「ふうん、まああの子の事はいいわ。ちょっと話をしましょ。他所からの冒険者なんて中々来ないのよ」

そう言つてキリアは炊事場においてあつた、膝位の高さがある樽を此方に転がしてくる。

ついでに杯を二つテーブルに置いた。

「冒険者なんだし飲めるでしちう？　付き合つてよ」

「茶が出ると思っていたが。こんな時間からか？」

「もう夜よ。大してする事も無いし何時もはもう私も寝ちやうわ」

そう言いながらキリアは樽を開ける。

アルコールの匂いと共に、仄かな甘い匂いが漂つ。

色は紫色。ぶどう酒だった。

キリアは杯を直接樽に入れ、ぶどう酒を注ぐ。

「飲むのはいいが、ぶどう酒は余り飲んだ事はなくてな。酔つようなら小屋のほうへ行く」

「潰れたら毛布くらいは掛けといて上げる」

「そういう話じゃない。女性の居る家で眠るのはどうかといつ話だ」

「はいはい。妹の恩人がそんな野蛮な人間じゃないって信じてるから大丈夫」

やや茶化すようなキリアの言方に、これは言つても無駄だとベルギオンは早々に判断した。

元よりどこであつても何時であつても口で男は女に勝てないので。

ベルギオンは自分の前に置かれた杯を掴み、ぐっと傾けてぶどう酒を呷つた。

日本に居た頃飲んだ物より雑味があるが、アルコールも強くなくやや酸味はあるがすつきりと飲める。

「美味しいな。自作か？」

「ラグルがね。近くにぶどうの木があるから毎年実をつけたらそれを使って作ってる」

そう言つてキリアも一息でぶどう酒を飲み干した。

「おいし。と言いながら一杯皿をついで口を付ける。

どうやら付き合つしか無さそつだ。ベルギオンは軽いため息を吐

き、ぶどう酒を掬つ。

アルコールも強くないし、この体も酒には強い様子だ。
酔つ払つ事は無いだろ？

「まずは、やつさも言つたけどあの子を助けてくれてありがとう。
貴方がいなければ死んでいたと想つとぞつとする」

「ああ。その礼は十分受けている」

「死んでたら絶対ゴブリンの巣穴に突っ込んでたよ」

「それだけ大事つて事だろ？」「

「そうね。うん。で、貴方の事なんだけど。育つた所つてどんな所
だつた？」

「……、じじよりはずつと平和で、退屈な所さ」

「退屈、ね。そこが嫌で飛び出して冒険者になつたの？」

その問ごとに答える言葉をベルギオンは持つていなかつた。
何を言おうともこの世界の常識とかけ離れた物になつてしまつだ
るつ。

そう判断し、キャラクターとしてのベルギオンの記憶を思い出す。
その記憶とベルギオンの感情を混ぜて話し始める。

「そう、……だな。退屈だつたんだ。あそこは。だから、色々な場
所を見てみたいと思つた」

「思つたよりロマンがあるんだ。それで？」

まだ確信はしていないが、やはり「ディエス」とこの世界は違う。国の名前や、モンスター等もなんとかぽかしながら話していく。合間合間にキリアが質問してきたので、出来るだけ矛盾しないよう普段は余り使わない頭を回転させた。

基本的な知識が抜けてるので、どこにでも居そうなモンスターの話に限つたが。

子供のグリズリーの群れと戦つた事、獅子に追いかけられ命からがら逃げ切つた事（獅子はBOSSだ。そして実際には死んでデスペナルティを受けていた）

鉱山で珍しい石を探した事などだ。

キリアはふどう酒を飲みながらそれを興味深そうに聞いている。女性の前で話をする事は決して悪い気分はしない。

ベルギオンは酒の助けもあり、乗り切る事が出来た。

「面白い話だつた。私と同じくらいなのに中々いい装備してたから、どう生きてきたのか興味があつてね」

「装備は拾い物みたいなものだ。……流石に飲みすぎたな。これで失礼する」

気付けばかりの量を飲んでいる。

酔いこけ回つてないが、体の体温が上がつている自覚があった。

「分かった、私も寝る。そうだ、明日ちょっと手伝つてよ。折角の

男手だし」

「世話になるし引き受けよう。じゃあな

酒に因る暖かさと、体に残つた少しの疲れが心地よい眠気を誘う。ベルギオンは家から出て、小屋に入ると敷かれたシーツに身を潜

らせてすぐに眠りに付いた。

鳥達が鳴きながら空を羽ばたいていく音が聞こえる。

ラグルは日が昇り始めて、空の暗さが和らぎ始める頃田を覚ました。

やや肌寒いが、用事を済ませていれば直に昇つていく太陽の光で暖かくなるだろ？。

身を起こしたラグルは隣のシーツを見るが、用意した状態のままだつた。

姉のキリアはシーツに入りすらしなかつたのだろう。
良くある事なのでラグルは気にせず、一組のシーツと毛布を置んで仕舞う。

部屋へと繋がる扉を開けると、キリアはテーブルに突っ伏して気持ち良さそうに寝ていた。

ぶどう酒の樽は中身が大分減っている。

話をすると言つていたから二人で飲んだのだろうが、姉は一人になつた後も飲んでいたのだろう。

手際よくラグルはそれらを片し、水瓶の水を器に移し顔を洗う。

その後ラグルは寝巻きにしていた服を脱ぎ捨てた。

今身に着けているのはショーツだけで、弱い朝の光に照らされた肉体はそれだけで強い輝きを持っている。

気の簾笥から着替えを取り出し、それ等を身に付けていく。

一度胸元を見て、机で押しつぶされ形を変えているキリアの胸元を見る。

何事も無かつたように視線を鏡へと向け、身嗜みを整えた。

何時もよりもほんの僅かだけ時間が掛かっている。

「問題は無いですね」

ラグルはそう呟やいて脱ぎ捨てた服を仕舞い、テーブルに突つ伏しているキリアの上半身を引き上げ、横へと倒す。
支えを失ったキリアの体は自然と床へと向かっていき、床へと激突した。

「ぐはっ」

そう呟くものの、未だキリアの意識は覚醒していない。

やや寝息が小さくなつたので、少しすればおきてくるだろう。

竜人の濃い血を引くキリアは中々頑丈だ。

起こしていくうちに段々とキリアは慣れ始め、ついにはここまでやつても起きなくなつてしまつた。

何か行事のあるときは起きるので単に起きるのが面倒なだけだろう。

床に突つ伏したキリアをそのままに、家を出る。

村は森に遮られているので余り風は無いが、澄んだ空気が心地良かつた。

隣にある小屋の前に立ち、ラグルは控えめに何度もノックをする。人の気配はあるのだが、一向に返事は無い。

「失礼します」

そう断つて、ラグルは小屋へと入る。
そこにはシーツに包まつて寝ていたベルギオンが居た。
寝相などで乱れた様子も無い。

(意外ですね)

昨日話した限りがさつな様子は無かったが、若くても男でしかも荒くれ者の多い冒険者だ。

もつと寝相が悪いものかと思っていた。

難しい顔をする時もあり大分年上に感じていたものだが、眠つている顔は起きている時の少し固い表情も無く、青年らしい健やかな顔だ。

このまま寝かせたいという気持ちもあつたが、田の出の内にやることはない。

ベルギオンが起きた時ラグルもキリアも居なかつた、では些か問題がある。

「起きて下さい。朝です」

ラグルはそう判断してベルギオンの体を揺らし、声をかける。

何度か揺するものの、一向に田が覚める様子は無い。

「起きて下さい」

少し強めに揺すると、ベルギオンはシーツを握り締め身を縮めてしまつ。

(むつ)

その様子に少しだけラグルは腹が立つ。

仕方なくシーツを剥がそうとすると、握り締めた手は微動だしない。

拳句後50分、なぞと寝言を言い始めた。

これは強敵だ。しかしキリアといつも長い間の敵を起こし続けていたラグルに死角は無い。

ラグルは今までキリアを起こしてきた方法を思い出し、適切な技を選ぶ。

シーツから手を離すと、寝ているベルギオンは安心したのか体の力を抜く。

読み通りだつた。

ラグルは立ち上がり、右肘を前に突き出し、そのまま軽く飛んで滞空中に体を90度傾ける。

肘はベルギオンの腹へと一直線に落ち、見事にめり込んだ。

「ぐほおつー？」

「……やりすぎました」

ベルギオンの体は噴出した声と共にぐのぐの字に折れ曲がり、そのまま脱力した。

その後起きたベルギオンは腹の謎の痛みに頭を捻るが、その答えを得る事は無かつた。

その際のラグルの顔はとても眩しい笑顔であった。

農作業と回し蹴り

ベルギオンは腹をさすりながら、冷たい水で顔を洗う。起きてから腹が痛い。どうにも理不尽な目にあつた気がする。ラグルに何か知らないか聞いてみたが、笑顔で笑うばかりで答えてくれなかつた。

追求しようとすると、第六感とも言つべき何かが警報を鳴らし怖くなつたので止める。

知らない方が良い事もあるのかも知れない。

ラグルが水の入つた桶と共に、手ぬぐいを持つてくれたのでそれで顔を拭く。
タオルのような柔らかい感触ではないが、滑らかな触り心地で気持ちよい。

「おはよひじざいます」

「ああ、おはよう」

「目は覚めたようですね。起こしに来た甲斐がありました」

「大分起きるのが早いんだな。空はまだ白み始めたばかりだろ」

寝足り無い部分はあるが、早朝独特の澄み渡る空気と太陽が温める前の冷気、腹の痛みはそれらを容易く追い払う。
しかし、これほど早く起こされるとは思つていなかつたので少し驚いたのも事実だつた。

「陽が落ちる頃に寝て、陽が昇る頃に起きるのは普通ですよ？ 爛れていたんですね」

「人聞きの悪い事を……、確かに夜更かしも多かつたが」

「冗談です。昨日は姉の相手をして頂きありがとうございました。
すぐ朝食にするので家に来てくださいね」

ラグルはそう言いながらシーツや毛布を畳み、脇へと仕舞つ。

「相手といふか、酒を飲んで昔話をしていた位だ。朝食を作るなら
何か手伝おうか?」

「料理はできるんですか?」

「皮むき位なら出来るぞ」

「……実が無くなりそつなので遠慮しておきます。昔話は少し興味
が有りますね、私にも聞かせてください」

「そうか。分かつた」

にべも無く断られた。

ラグルはしつかりしているし、任せた方が良さそうだ。

「その代わり後でシーツを干したりするのを手伝ってください。
恩人をこき使つのは心が痛みますが、申し出てくれるなら何の問
題も有りません」

「手伝つて言つたのは料理……」

「ありがとうござります」

満面の笑みでお礼を言われる。

幼さが残るとはいっても、可憐な少女にお礼を言われるのは悪い
気はしないのは事実だ。

昨日キリアにも手伝つと言つていた事だし、此処に居る間何もし
ないといふのは余りにも一人に悪いだろう。

「……任せろ」

時間が経つ度にラグルが逞しく感じるのは、果して氣のせいなのだろうか。

女性という神秘と謎に満ちた相手に、ベルギオンはしばし考え込むのだった。

「突つ立つてないで、早く来て下わー」

「ああ」

家に入ると、キリアが柔軟していた。服装も昨日と変わっている。田もきつちり覚めている様子だ。

「おはよー」

「おはよー、朝から柔軟しているのか」

「まあね。体をほぐしておかないと、全力で動いたりすると力が強くて腱を痛めたりするのよ」

そう言いながらキリアは上半身をぐつ、と逸らす。来ている服は薄着で、ベルギオンからしてみれば田の毒としか言いようが無い。

「じほん」

「おー?、悪い。塞いでたな」

「いえ、構いません。座つていてください。お湯はもう沸かしてあるのでお茶を先に出しますね」

ベルギオンがどくと、ラグルは炊事場で手際良く準備を始めてしまう。

その手際の良さに感心しつつ、少し気まずい思いをしながら席に座つた。

すぐにお茶を入れたポットと杯が出てくる。

ポットは木ではなく何か金属のような物で出来ていた。

ステンレスが近そうだが、何か違う気がする。

キリアは柔軟を切り上げ、お茶を注いで飲み始めていた。

ベルギオンもそれに習つ。

「そういえば今日は、というか何時もどういつ事をするんだ?」

「何? 美人姉妹の私生活が気になる?」

「自分で言うな……、こういった村は初めてだからな。興味はある」

「特別な事はしないわ。朝から畠を耕して、畠からは男衆は開墾や木の伐採。私はそつちを手伝つかな。

狩りをする事もあるけど、今の時期は採れないからやらないわ。女は洗濯とか薬草摘み。祭の時くらいよ、何時もと違うのは。それも今年はもう終わつてるし」

「そういうものか。開墾や伐採はなんというか、やつてみたい気はするな」

キャンプでもそういう経験は出来ないだろ。

村人にとってはそんな気楽な話ではないだろが。

「力は有りそuddし歓迎するけど、とりあえず畠かな。

刈り入れは終わらしてから地均ししないといけないのよ。女二人の細腕じや辛くてねー」

「ラグルの、だろ」

「ちえつ。でも辛いのは本当。ラグルは畠から……あー、ラグルは付いてきなさい。

薬草摘みはしばらく禁止になる筈だし

「分かりました」

昨日ゴブリン達がラグルを襲つた事だろ。

湖の近くが薬草摘みの場所だとするとかなり危険だ。

「なあ、あいつ等が住み着いた場所は湖の向こう側か？」

ラグルに聞こえないように、小声でキリアに声をかける。
その意図を察したのか、小さく頷く。

湖から此処まで1時間かかっていない。

奴らのテリトリーが湖の向こうだとしても、かなり近くなつてしまっているのではないか。

この村は途中にあつた川で飲み水や生活用水を確保している様子だった。

川まで奴らが来れば、その時点では水が絶たれる事になる。
川以降の道のりはある程度整備されてしまっていた。

勝負を決めるとすればそれよりも早く動かなければ、地の利が完全に無くなってしまう。

半月後にエルフの部隊が動くというが、準備も含めればもつとかかるだろう。

此処とエルフの街がどれほど友好があるのか分からぬが、オーガに続けてもし何かあればまず援軍は来ないと思う。

（それに繁殖力が強くて天敵が居ないなら、テリトリーの広がる速度は相当速いんじゃないか？）

「ディエス」以前にプレイしてたゲームでは戦争の指揮をやっていた。

その影響で、此処で戦うならどうするかを考えてしまう。
それまでには此処を発つてゐる可能性は高いはずだ。キリアも煙が終わつてしまえば手もあく様子。
情が移つたのだろうか。それとも顔見知りになつた相手が死ぬのがイヤなのだろうか。

「難しい顔してるね」

キリアはじり、ヒリヒリを見ていた。
気付けば茶は冷め、朝食の準備はほぼ整っている。

「どうしたんですか？」

最後に皿に乗せたパンを持ってきたラグルは、その様子に首をかしげる。

「なんでもない、なんでもないよ」

「ですか。じゃあ食べましょう。食べ終わったら畠の手伝い御願いしますね」

「ち、食べよ食べよ。長老のヒヨリより美味しいわよ」

「それは楽しみだな」

朝食のメニューはトマトの入った葉のサラダにパン、それに芋と南瓜が入ったスープだった。

サラダにはレモンが絞られており、柑橘系の匂いが僅かに香る。美味しそうだ。

「頂きます」

美味しいかつたと思うが、心に渦巻いた不安のせいか余り味わえなかつた。

食べ終わった後、ラグルが食器を片しキリアに畠へと案内される。

鍬は家を出るとき持たされた。ラグルも用意が終われば来るの事だ。

家の裏側を少し行くと、低い柵で覆われた畠が見えてくる。

姉妹一人で維持しているにしては大きい。90?はある。土地は開墾すれば有り余っているのだから、割り当てとしていいのかも知れないが。

キリアの力は相当強いという。この畠を維持していたなら確かに大した物だ。

「よし、じゃあ耕そう。1からだからそうね、私はこっちからやるからあっちの端から耕してきて。

浅くじゃダメよ。きちんと土を掘り返してね

「餓鬼の頃だが経験はある。それじゃ、やるか

キリアの指差した方向へと歩き始める。

合間で振り返ると既にキリアは鍬を構えて振りかぶっていたところだ。

地面に突き立て、中々深いのに苦も無く土を掘り返して耕してい

る。土の固さは分からないが、あのペースを維持出来るならそこ等の男より力があるだろう。

指定された場所に付き、ベルギオンも畠を耕し始める。

土はそれほど固くないが、深く入れると抵抗も強い。

しかしベルギオンの筋力なら問題なく耕せる。

久々だつた太陽の下での運動に、ベルギオンは夢中になつて耕し始めた。

筋肉が軋みを上げ始める頃目に汗が入り、汗だくなつて耕し始めた。

とに気がつく。

体を上げて思いつきり伸びをすると、筋肉が伸ばされて気持ちが良い。

ずっと集中していたから中々耕せただろう。腕で汗を拭い、キリアの方を見てみると此方よりも3割増しは進んでいた。

(まじか!)

キリアも一旦作業を中断し、此方を向いてベルギオンに手招きしている。

いつの間にかラグルも来ており、座つて此方の作業眺めていたようだ。

声をかけられた覚えは無いから、それだけ力が入っていたのだろう。鍔を持って、二人の方へと歩き出す。

一人の居る場所は大きく平らな石が幾つかあり、そこに腰掛けた。どうぞ、とラグルから差し出された杯を貰う。

水がなみなみ入つていたそれを一気に口に流し込む。

ひんやりとしており、果汁が入つてあるのか仄かにレモンの味がする。

美味しい。汗をかいた体にはこれ以上無いほどの美味さだ。

「中々進んだね。この調子なら明日には終わるよ」

「邪魔をしないように声をかけませんでしたが、凄いペースでした」

「大分いいペースだと思つたんだがな。キリアの方が進んでるようだ」

「そつちがいいペースだったからこつちも頑張つたからね。本当は一週間はかけるつもりだったんだけど」

キリアも同じくらい汗をかいており、上着は既に脱いでいる。下に来ていたのは袖の無いのシャツで、それも汗に濡れていた。

「そのままだと風邪引くな」

「あー、汗でべとべになつてゐる。大分進んだし畑は此処まででいいかな。うーん、昼には少し早いわね」

「もうそんな時間か？」

空を見てみると薄つすらと白かつた空は爽快なほど青々としている。

雲も無く太陽も輝いていた。汗もかく筈だ。

「お弁当は作つてきますよ。でも食べるには確かに少し早いですね」

キリアの着替えと共に、竹で出来た箱をラグルは示す。

「少し時間が余るかな？ そうだ。じつせ着替えるしつつと手合わせしない？」

「手合わせ？」

「危なくないですか？」

「確かにその辺に……あつた。これならそこまで危なくないでしちう？」

？

心配するラグルに、キリアは近くにあつた木の枝を一本持つてくれる。

枝と言つても直径五センチはある太い物だ。長さは80センチ程。まともに受けければ骨くらいは折れるだらうが、武器を使ってやるわけにも行かない。

「いいのか？ 聞いていたように強いなら加減は出来ないぞ。俺もあまり戦いの経験があるわけじゃない」

むしろ殆ど無い。ベルギオンの体と、染み付いた技量だけが頼りだ。

とはいえるモンスターが普通に居る世界。体の動かし方を体験するいい機会かもしない。

「いいよ。審判はラグルがしてね。危ないと思つたら止めればいいから」「無茶は絶対にしないで下さい。いいですね」

「分かった」

10歩分程度キリアと間合いを取る。

気持ち悪かつたので汗だくなつていてシャツを脱ぎ捨てておく。もう一枚のシャツも脱ぎたかったが、女の前で上半身とはいえ裸になるのはどうかと止めた。

向かい合い視線が合つ。

(凄い目線だな)

これまで見たどの女性よりも強い意志を視線に感じる。濃い竜人の血が、人よりも強い存在感をもたらしているのか。ベルギオンは思わず唾を飲み込む。

「では 始め！」

ラグルの声を聞き、両者は同時に間合いを詰めていく。

10歩分しかなかつた距離は一氣につまり、ほぼ一足一刀 1になる。

此方が3歩進めた時間でキリアは5歩進めている。見た目は細身で速さはあると思ったが、予想よりも早い。

キリアは右手で木を持ち、此方へと進みながら肩まで振りかぶつた後、横一線に振りぬいてくる。

受け流す技量も自信も無い。木の枝を右手で握り締めて、手首を捻りキリアの方へ手の内を向けた。

そのまま力を入れ、7分の力でキリアの斬撃に合わせて振る。目は完全に追いつけている。体の動きはぎこちないが、それは慣れていない所為だろう。

木同士でぶつかると独特の鈍い音が鳴り響く。それだけで木がやや軋んだ。

(お、もい！　弾かれる！？)

右手の力だけでは衝撃を受け止めきれず、思わず左手も木を掴み、力を込める。

両手ならベルギオンの力が優り、衝撃をなんとか受け止めた。キリアは切り結びでジリジリと押されているのに、左手を使おうとしない。

一度に押し切られないその力は見事だったが、このままなら寸止めで此方の勝ちだ。

そうベルギオンが思つた瞬間、キリアははつきり分かるほどに“笑つた”

(なんだ？)

そう思つた瞬間、今まで対抗していたキリア側の力が一瞬で無く

なり、ベルギオンは込めていた力に振り回されそのまま振りぬいてしまう。

(やられた！ やばい)

キリアは次の動作に入っている。右足を直に左回りに回転。左足は浮いている。

木はもう間に合わない。

ベルギオンは咄嗟に木を捨てて両肘で腹を固める。

その次の瞬間、肘で固めた場所をキリアの左足が蹴りぬいた。

(なんつー器用な)

回し蹴りだ。切り結んだときも感じたが、スレンダーな見た目のどこに力があるのか。

70kgはあるだらけベルギオンの体が浮き、地面から足が浮いた。

そのまま後ろへと飛ばされる。

「そこまでですー。」

ラグルの声が響く。

戦う前に聞合いで取っていた辺りに吹き飛ばされていた。

ベルギオンの体が反応したのか、綺麗に防御できており痛みは無い。

しかし、見事に引っ掛けられてあっさり武器を手放されてしまった。

(まんまとやられた)

完敗だ。

キリアの右足の踵は少し地面に埋まっていた。
キリアは左足を上げたまま口角を上げている。
その嬉しそうな顔に、悔しさも少し和らいでいた。

1 一足踏み込めば刃を交える距離

少しづつ立ち込める不安と不穏な影。そして決意

蹴られた衝撃は強かつたが、ぶつからずに地面で受身を取ったのでダメージは無い。

お互い装備といえる物は、木以外は無かつたのも影響があるだろう。

ブーツならまだしも、鎧で蹴られれば骨が砕けている。

直ぐに立ち上がり、思わず口元が笑った。

「もつかいだ」

「そうこなくちゃね」

それを見てキリアも笑つ。

次は同じミスはしない。力で負けていることも分かつたのでやりようはある。

そして何よりも、かつて出来ない事が出来る事が楽しい。

(この体ならば、戦う事が出来る…)

キリアも戦いに楽しみを見出すタイプなのだろう。

既に待ち構えていた。

ベルギオンも直ぐに移動して距離をとる。

ラグルはそんな様子の二人を見て、審判を続ける。やや呆れている様子ではあるが。

「怪我をしたらすぐ止めます。 始め！」

再びお互いが動いた。

二人は時にはフェイントを使い時には「ゴリ押しし、相手の防御を崩し相手の攻撃を弾く。

力で負けるベルギオンは力勝負を避けながら攻撃を重ねて相手の隙を付こうとし、

キリアは強引にベルギオンの武器を弾いたり、あえて隙を作る事で誘い込み、乗ったベルギオンの隙に力の入った一撃を加える。

手合わせはキリアの方の木が砕ける5回目まで続いた。

勝敗はベルギオン一勝、キリア三勝。

キリアが三勝になつているのは武器が砕けていなければ、そのままキリアの一撃が肩に当たつていた為だ。

擦り傷こそ多いがベルギオンは受けきる事で、キリアは弾いたり避ける事で一撃を避けた為大きな傷は無い。

「二人とも子供ですか」

ラグルはその様子に呆れつつも、そんな二人の為に水と布を用意し簡単な手当をした。

「そうだ、魔法使えるんだよな?」

「使えるわよ。流石に危なすぎるから使わなかつたけど。治療出来ないし」

ラグルの目もある。使えとはいえないだろう。

「そうか。少し興味はあつたんだが」

少し、どころか実際に目にする魔法というのはとても見てみたい。口元は閉じたままだが、そんなベルギオンの瞳にキリアは気付いたのか小さく笑う。

「目は少し、どこのじやないわよ？ 空に向けてならいいか。疲れるから一度だけ。よく見てなさい」

キリアは汗でべた付く赤い髪を後ろで纏め、呼吸を整えていく。

「火は怒りにして生命の輝き。なればその力はあらゆる物を燃やす力である。火炎^{フレイム}」

何時もより通りの良い声で、キリアは唱える。

文字が進むことに、キリアを中心に淡く赤い光が舞う。そして火炎^{フレイム}と言った瞬間、漂っていた赤い光が一度に集約し、火炎の球となる。

キリアと少し離れていたベルギオンは、僅かだが皮膚が火に炙られる熱を感じる。

大きさは両手で包み込むにはやや大きい。キリアが指先を上に向けると、それに従うように火炎^{フレイム}は上空へと疾走していった。

燃え盛る火が尾のように引き、やがて上空で見えなくなつていく。

「どう？」

「凄いな……火の魔法か。魔法自体始めてみるが、あの大きさだ。食らつたら火傷では済まんな」

少し離れて尚あの熱気だ。直撃すれば黒焦げになる。ベルギオンの褒め言葉にキリアは機嫌を良くしたようだ。

「火に耐性が耐魔力が無い人だと、すぐ治癒の魔法をかけないとまずいかな。

小さい頃、冒険者の置き土産でこの魔法が載つてた本があつてね。試しに使ってみたら使えたわけよ。

魔法を使えるかは血統で決まるらしいし、私の血の源泉は火竜だから相性が良かつたんでしょうね」

「なら俺は無理そうだな。源泉といつたが、それは分かる物なのか？」

「伊達に竜人の村はやつてないよ。といつても、石に手を置くと血に反応して色が変わるだけなんだけどね。竜人以外が触つても効果は無いけど？」

「そんなものなのか。ラグルは何の竜の血を引いているんだ？」
「私ですか？ 血が薄いのでほんの少し光つただけでしたけど、金色でした。黄金竜だと思います」

黄金竜、なんだか凄く強そうだ。

「黄金竜は種族じゃないからね。竜人となつた初代の竜の一体。この大陸の何処かで果てたつて言われてる」

「夜でも少し目が利くのと、多少目が良いだけですね。力もあれば襲われても平気だつたんですね」

「無事に済んだんだから気にしない。それより弁当食べようよ。サンドイッチでしょう？」

「はい。カラシナの種で味付けしますから、少し辛いですよ」
「少し辛いくらいなら大丈夫だ。俺も食べよう」

ラグルがランチボックスを開けると、箱一杯にサンドイッチが詰まっており、具も葉や芋の他に干し肉が使われていた。

カラシナというとからしの材料だ。こういったものは日本と名前の類似点が多い。

体を思いつきり動かした後なので腹も減つており、ピリリとする辛さが良い刺激となり三人で瞬く間に平らげてしまつ。

キリアは良く食べる方だが、ラグルも結構食べる。

その食べっぷりに驚くと、良く働くとお腹がすくんです。と奢められてしまつた。

よく食べるのは良い事だと思つ。それだけ健康だといつ事だから。

「しかし汗かいちゃつたな。早いけど湯浴みしてこよつつか

キリアはそう言つて汗を吸つた服を揺らす。

「服もべとべとですし、洗わないとダメですね。ベルギオンさんの服も洗つておきます」

「悪いな。すまんが上着だけ頼む。俺は川で体を洗つてくるよ。その方が気持ち良さそうだ」

「水浴びも気持ち良さそうね。一緒に行こよ」

キリアはベルギオンをからかうように言つてくるが、返事をする前に首の根っこをラグルに捕まえられた。

「姉さん? 冗談も休み休み言わないと。汗臭いのでせつせつといつてください」

「ちょっと、酷くない?」

「もたもたしてると風邪を引いてしまいます。

一度家に戻りますから、ベルギオンさんも済んだら戻つてきてく

ださい。そうだ、拭く物はありますか？」

「昨日使った奴がある。ついでに洗つてこひよつ」

「分かりました。道は看板があるので大丈夫ですね……では」

二人はそう言つて家へと戻つていいく。

ベルギオンは一人になると、ゆっくりとした動作で少し大きい石を拾い、勢いよく振りかぶつて森へと投擲する。

「G u R a a a a a ! ?」

ベルギオンの力が込められた石は一直線に森へと奔り、何かにぶつかり呻き声が上がつた。

その呻き声の元へと、ベルギオンは一気に駆け出す。

石をぶつけられた生き物はゴブリンだつた。

頭に石が当たったのかふらふらとしている。

ベルギオンはゴブリンが体勢を立て直す前に近づき、右腕をゴブ

リンの首に回し、一気に絞め落とす。

大きさはともかく体のつくりは人間に類似しているなら、強引に絞め落とす事も可能なはずだ。

（あんまり抵抗してくれるなよ！）

少しの間暴れているが、大した力も感じられずやがて動かなくな
る。

ゴブリンの体の熱が引いていく感覚を右手で味わい、以前のとき
同様軽く沸く罪悪感をかみ締める。

（嫌な感触だ）

キリアが魔法を使つたとき、それに驚いて僅かだがこの「ゴブリン」が姿を現していたのをベルギオンは見ていたのだ。

魔法を見ていたこいつをそのまま逃がすわけには行かなかつた。火というのは強力で分かりやすい。それ故に時間があれば何から対策は立てられるのだ。もしこうすることもある。

森の奥深くなら見過ごしていただろうが、森に入つて少しなら今陽の光なら見ることは出来る。

その時にも、今もこの一匹以外は見当たらない。群れで動くのが当然だと思っていたが……

（一匹という事は襲いに来たんじゃない。偵察だ）

ここに偵察に来れるほど勢力が広がつてきているという事だ。よく目を凝らせばキリアやラグルも見つけられた筈だ。

ゴブリンには隠れる技術はなかつたし、目もそれほど良くない。これぐらい近づかないと見えない様子だ。

こいつを始末した以上、もし学習するのなら偵察はもつと手前で数を減らすより力を貯める。

（エルフ達が来るまで半月？ 少しは頭を使うが、こいつ等がそれほど待つとは思えない。早ければ一週間もないぞ）

獣は本能で動く。ラグルを襲つた時のよつに勝機を感じたら止まらない筈だ。

畠は明日には終わるという。

準備も含めて明後日には村を発てるだらう。

行き帰りを考えれば、キリアは入れ違いになつて助かるかもしない。

(ダメだ。先が無い)

助かつてもキリアは嬉しくないだろ？。怒りでそのまま奴等に突つ込むのは考えなくとも分かる。

そうでなくとも「プリンが健在で村が機能しなくなれば、キリアでも命の危険がある。

飘々とした部分もある。しかしそれも余裕があつてのことだろ？。昨日の夜、偶にキリアの顔は何か悩んでいるかのように真剣な顔をしていたのだから。

必要なとき必要な力があればいいと思つていた。

しかし大人になつて、必死に頑張つてようやく必要な時に必要な力があるかどうかという事を実感する。

そして今必要な力がある。

そう心に思つと不思議と不安が無くなり、勇気が湧いてくる。この気持ちが一時的な物では知つていたが、この気持ちを持ち続けることができるのも分かつていた。

(あいつ等を……ロード「プリンを呪ぐ。この世界はまだ全然分からぬから冒険者を続ける必要があるし、逃げてばかりもいられない。

それにあの一人も死なない)

勝てば、嫌な思いもせずに済む。何かできると分かつていて見捨てれば、それはもつずつと心に残り続ける。なら答えは、一つしかない。

それを祝福するかのよう、涼しい風がベルギオンを包み込む。しかし服が汗で濡れているベルギオンにとっては、それはやや寒い。

「風邪引いちや洒落にならん。さつと流すか」

死体が見つからぬよう、少し奥へ進み埋葬する。こいつ等モンスターは敵だ。いずれは罪悪感無しに倒せないと、何時か痛い目を見るだづ。

ベルギオンは汗で濡れたシャツを脱ぎ、川へと向かづ。

川に着いた後は水浴びの気持ち良さについ泳いでしまい、大分時間が経つた後慌てて帰る。

戻った後にラグルに怒られ、キリアにその様子を笑われるという情けない事になつた。

その後キリアとラグルに付いて増地予定の森に行き、村の若い男たちと合流して木を切り根を掘り起こす。

若い男たちといつても8人程度だ。この重労働に耐えれるのがこの8人なのだろうが、次の世代というには少なすぎる。ゆつくりと人口を減らしながら、偶に居つくる人を交えて繋いできたのかもしれない。

そしてここまで減った時にロードゴブリンという相手が現れたのだ。

今日の昼、長老の命で薬草摘みも暫く禁止になつた。

皆懸命に伐採作業に勤しんでいたが、そう考えると不安を鎮めるために懸命にしているように見えた。

男達は皆気持ちの良い連中で、余所者でしかも若い女の家に（実際は小屋だが）世話になつてゐるといつのに、困つてゐる事は無いかとか、蜂蜜が余つてゐるから三人で食べろ、等親切だった。

日本では余り人の親切に縁の無かつたベルギオンは、内心申し訳が無いほど嬉しかつた。

その分を斧に込め、木を切り倒し渴采を浴びる。

ラグルはその様子に凄いです、と感心仕切りでキリアも褒める。ベルギオンは少し照れながらも、木を切りながら何か使える情報はないか、集めていた。

そして何度も休憩を挟んだ増地作業も解散となり、再び家へと戻つていく。

斧での伐採や根の引き抜きは、畠以上の重労働ではあつた。しかし風が良く流れ、作業場所も日陰だったのでそれほど汗はかかずにするんだ。

帰路の途中ベルギオンは途中で止まり、その様子に一人は足を止めて何かあつたのかと振り返る。

「少し村長と話がしたい。先に帰つてくれ」

「？ 何か用事でもあつたんですか」

こきなりの申し出にラグルは首をかしげる。

「また話をしようと言つてただろ？ 畠も早く終わらうだし、少し話をしておこうと思ってな」

「姉さんが道案内できるようになれば、外へ案内するんでしたね。
もっと長くいるものと思つてました」

そう言つてラグルの視線は少し下がつてしまつ。
そのラグルの頭をなでで、ベルギオンは慰める。

「そんな顔をするといつちも悲しくなる。ラグルは笑つた方が可愛
いぞ」

「……恥ずかしい事をいいますね。後頭をなでられるのは恥ずかし
いと言つた筈です」

しかしラグルは撫でられるままだつた。

「余り遅くならないでね。ラグルが夕食を三人分作る用意してゐるか
ら。長老の家で食べちゃうとラグルがかわいそうよ」

「用意はしてますけど、変な言い方はしないでトセ」姉さん……」

そして道を分かれ、長老の家へと向かう。
空は少し赤みが差してきたが、まだまだ明るい。
決めた決断を、心でより強くする。

何度か扉をノックをすると以前と同じように「あい」と声が
したので家へと入る。
意外な来客に驚いたのか、長老はほんの少しだけ呆気に取られた
ようだ。

しかしベルギオンの硬い表情に気付き、パイプをふかしながらも
神妙な顔になる。

「おやベルギオン殿。どうなされた」
「まずは長老に話しておくべきかと思つてまして。

今日の晩、ラグルたちの畠の近くでゴブリンが居ました。それも
一体。

偵察だと思います」

村のすぐ近くでゴブリンが居たところのせ、やはりショックだつ
たようだ。

長老は銜えていたパイプを落としそうになる。

「な、それは確かなのですかな」

「はい。倒して死体は目立つといけないので少し奥に埋めました。
場所は覚えているので掘り返せます」

「そうですか……、ゴブリンは繁殖力は強いが、幾らなんでも早す
がれる。

それに偵察など今までしてきた事は無いですがの。　ローデゴ
ブリンか」

やや責めた顔で長老は情報を整理する。

ベルギオンも同じ意見だ。

「多分そうだと思います。ゴブリンは一度見た感じ頭は悪そうです
し、

俺が攻撃するまで身を隠してました。長の命令だったと思います
「……分かりました。若い者に武器を集めさせた方が良さそうです
な。

とは言つてもキリアが持つてゐる斧槍と狩り用の弓以外は斧や
鍬しかありませんが。

ベルギオン殿は明日にでもキリアに送りやましよ。巻き込まれ
てはいかんですからな

「　その事で来たんです。俺も戦わせて貰えませんか

その言葉に長老は驚くが、真意を測る為かベルギオンの瞳を覗いてくる。

「貴方は見ず知らずの方だ。

我々が恩こそあれ、貴方には危ないだけで得る物はない。この村にはお礼に出せるような金品もありません。

もし若い娘を寄越せといふならお断りを……」

長老の言葉にベルギオンは首を振った。

「何も入りません。このまま襲われるのを知つて逃げ帰る位なら、俺は戦いたいと思つてます」

「貴方のような若者が命を無駄にする事はないのですぞ？」

しかし、長老はベルギオンを諫め様と言葉をかけてくる。

「死ぬ氣は有りません。一緒に心中しようなどと言つ甘つたれた事を言つているのでは有りません」

ベルギオンはそれを聞いても考えは変わらない。逃げる事を自分で拒否したのだ。

その意思は梃子でも動かないつもりだった。

「そういえば無償であなたは襲われたラグルを助けてくれたのでしたな。若いのに立派な方だ」

長老は髭をさすりつつ、ゆっくりとパイプをふかし部屋に煙をたなびかせる。

「自分の心に従つていいだけです。それにロードゴブリンに勝てば、

冒険者としての自信にもなります

「……本来なら心苦しい。ですが、この村のために力をかしていただけるというその気持ち、この老骨に痛く染みました。

御協力を御願いします。しかし、キリアも含めて狩獵はあれどあれほどの数のモンスター達と戦った経験はありませんでな。どうしたものか

いざとなれば無理にでも留まつて戦おうと思つていたベルギオンだつたが、協力を受け入れられて胸を撫で下ろす。

伐採の時に考えていた作戦があつた。

「俺に考えが有ります。上手くいけば、ロードゴブリンを引っ張り出して俺とキリアの二人で潰せるかもしません」

作戦と二人の思い

ベルギオンの言葉を聞いて、長老は興味深そうに髪を撫でた。

「作戦、ですか？ どのようなものか聞きましょ？」

「はい、その前に聞きたいのですが、確かにこの村は狩猟も行っています」と聞きました

「確かにやっていますが。今の時期は獣の多くが移動していくので、ゴブリン達も住み着いたのでやつておりませんが」「でしたら、獣の足を止める罠……トライバサミやくへつ罠はありますか？」

狩猟をしているなら、高い確率で罠があるとベルギオンは考えていた。

その言葉に察する物があったのか、長老は頷く。

「ありますぞ。トライバサミは余り数はありませんが、くぐり罠は獲物が踏んだら網や縄で吊るすやつですね？ あれは作ればかなり用意できます」

「良かった。奴らを誘導して罠を仕掛けようと迷っています。落し穴も作れば、かなり時間を稼げると感じます。

その間にゴブリンで一方的に攻撃して数を減らしていくば、数の不利はかなり無くせるかと」

(やついえば、奴らは何居居るんだ？)

長老が確認してからも時間が経っているだろ？。一度此方から見に行く必要がある。

「罠、罠ですか。確かにゴブリンが獲物用の罠に掛かるというのは何度か聞いたことがありますな。

村で弓が残つていて狩猟の経験がある者をかき集めれば、20人位にはなると思います。矢は予備が有りませんが、丁度今日伐採をした後です。

木を切り出した後で女衆総出でやれば5日で1000本位は用意できるでしょう。

くぐり罠も作らねばなりませんから、もう少し少なくなりますか」

1000本、ゴブリンの数は分からないが、20人分と考えれば一人50本だ。少なくとも800なら40本。

罠で上手く足止めできれば仕留めるには十分だろ。う。前提となる罠を上手く仕掛けることが必要だ。

「十分だと思います。下の奴らを一方的に倒せば、必ず長は出できます。

出でこなければ長の座を失うだけですから。

時間が有りません。早速明日から行動に移したいと思います」

「どうするか悩んでおつた所です。異論は有りませんな。明日の朝全員を集め、話をしましょう。

罠に関しては詳しい二人を紹介しますぞ」

「この申し出はありがたい。

名前や効果は分かっていても、専門的な知識はベルギオンには無い。

経験のある人たちの力が必要だつた。

「助かります。落とし穴は俺とキリアで掘るとして、トラバサミとくぐり罠をどうしようかと思っていたところで」

「キリアは力が強いですから、うつてつけですね。……ベルギオン殿。礼を言います。皆喜ぶでしょう」

そう言つて長老はベルギオンに頭を下げる。
ベルギオンは慌てて遮るうつするが、少し考え無粋だと思いその礼を受けた。

「任せてくれ、と胸を張つては言えません。でも、俺は失敗する気はしません」

「頼もしい。ワシも腕がなつてきましたぞ。これから忙しくなる。今日はもう戻つて休むと良い」

「分かりました。後もう一つ、奴らの巣穴の場所は分かりますか?」「ええ、住み着いた当初すぐにはキリアが見えてきました。絶対に突つ込むなと言つておいて良かつたと思つたものですね。

場所は湖から北に20分程度歩いた所です。詳しくはキリアに聞けば分かるでしょう。

思えば、奴らの巣穴が分かつたとき薬草摘みを禁止するべきでしたな」

「過ぎたことを言つても始まりません。その分、これからを頑張りましょ」

長老が落ち込むように肩を落す。
しかし、いつも言つていられない。

「 もうですな」

それは長老も分かっているのか、すぐに気力を取り戻した様子だ。

そうして長老の家から出る。

心臓が耳に聞こえるほど音を立てて鼓動を刻んでいた。

ベルギオンはいつの間にか握っていた右手を開くと、じわりと汗をかいている。

自分の言葉でこの村の人たちが動き、戦う事になる。

襲われるのではなく、戦うのだ。

座して待つより戦うべきという思いは変わらないが、言い出したことによる責任は強く強くベルギオンにのしかかる

(やる。やつてやる)

両手で顔に張り手をし、痛みと共に気合を入れなおす。

心臓は未だに何時もより多く動いているが、ベルギオンの足は迷い無く姉妹の家へと向かっていった。

ノックをしようとして、キリアに言われたことを思い出しベルギオンは少し悩む。

しかし着替え中だつたりすると困るので、やはりノックをした。

ドーボー、とキリアの声が聞こえ、扉を開ける。

「帰ってきたか。思ったより早かつたね。

ラグルなら水を汲みに出てるよ。何かあつたら悲鳴を上げろって言つてあるから」

部屋に入ると、キリアは椅子に座り、股の間に手を置いて椅子を傾けて遊んでいる。

しかし、緊張の抜け切つていなかつたベルギオンの顔を見たのか傾けるのを止め、テーブルに両肘を置いて前のめりになる。

「いい顔してる。男の顔だ。何かあつたのかな」

キリアはどこか嬉しそうにしていた。

それを見てベルギオンも残っていた筈の緊張が薄まるのを感じる。

「明日になれば分かる。と言いたいが、キリアやラグルには先に伝えよう。

俺はゴブリン達を討伐しようと思つてゐる

「……正氣？ 私が見に行つたときもう50体は居たんだよ。あいつ等は雑食だからいざとなつたら何でも食べる。

獣がいなくても増えるし、きっともう100は超えてる

キリアの声は、ベルギオンを試しているかのようを感じた。

疑うのも無理は無い。男一人加わつても、戦力比はそう変わらない。

い。

「尚更だ。俺の故郷には一宿一飯の恩義という言葉がある。

それに、折角助けたラグルがまた危ないというのも癪に障る

「恩があるのはこっちなんだけどね。そういうの、私は嫌いじゃないよ。

でもどうする訳？ 幾ら私と貴方がいても、数には勝てないわよ

「長老には伝えて、明日皆に言つ事になつてゐるからそれまで待つてくれ。俺も纏めたい事がある。

後、力をかしてもううだ、キリア」

「勿論。期待してゐるわよ

キリアは一人であつてもきっと戦う。

その意志の強さは、ベルギオンにとつて頼もしい。

そうして話していると、ラグルが桶を抱えて戻つてくる。

「おかえりなさい。ベルギオンさん、戻つていたんですね

「ああ、わしきな。そうだ、もう少し此処にいることにしたから、手間を掛けて済まんがよろしくな」

「それは構いませんけど、どうしたんですか？ 姉さんが済つたとか？」

「ちょっと、どうこの意味よ」

「そのままの意味です」

ラグルの言い分にキリアが噛み付くが、ラグルは桶を置きながらぱつぱつと切り捨てた。

「なに、元気で一つローラー、ハーフコンを倒して、武勇伝を作つておこりと思つてな」

ベルギオンは素直に囁つのが恥ずかしくなり、やや茶化してラグルに伝える。

すると、ラグルの目が丸くなつた。

「本当……ですか？ 嘘じやないですよね？」

「本当だ。それを伝える為に長老の所へ言つてたんだ」

「本当なんだ……」

やう言つと、ラグルは何かを言つと口を開けようとするが、直ぐに口を開じる。

何度も繰り返し、顔が真つ赤になつて寝室へと走り去つてしまつた。

「あの子、普段は冷静なんだけど、歳相応に絵本の騎士様つてやつに憧れがあつてね。

嬉しいんだと思つ。この状況つて、まるで御伽噺みたいじゃない

？

「騎士なんて大層なものじゃない。それに俺一人じゃとても出来ないさ。戦うのは俺じゃない。俺を含めた竜人の皆だ」

それはベルギオンの本心だった。この体になつて強くなつても、それはあくまで人間のレベルだ。

「そこで俺が皆を助ける、て言えばカツコイーのに。硬いしその方が似合つてるか。ラグルは今日は出でこなさそうだし、私が晩御飯作ろうかな」

「大丈夫なのか？」

「貴方に言われると無性に腹が立つんだけど。これでも女なんだから料理の一つくらうできるわよ」

そう言つてキリアは炊事場に立ち、小さい炎をそつとおこして竈に火をつける。

ラグルの汲んできた水を鍋に移し、料理を始めた。洗練された動きではないが、動作に迷いが無い。食べれる物を期待しても良いだらう。

派手というわけではないが、存在感のあるキリアが料理をしてみると凄いギャップを感じる。

やがて出でてきたのは、コーンを漬して煮込んだタマネギと芋のローンシチュー。

それとスライスされたパンだ。
美味しそうな匂いに、腹がなる。

「ラグルの分は後で持つていくとして、ちよつと早いけど先に食べよう

「分かった。明日も早いからな、頂きます」

「頂きます」

「ローンシチューは素朴な甘みもあり、野菜に「ローン」の味が染み込んで旨い。」

スライスされたパンも食べやすく、スープがほぼ無くなれば残ったパンで掬つて食べた。

直ぐに腹に収まつてしまつ。

「旨かつた」

「気に入つていただけたみたいで。」

用意は全部ラグルがやつたから私は煮込んだだけだけどね。美味しかつたなら次にあつたとき言ってあげて」

「ああ、分かつた。今日はもう小屋に行つておく」

「明日から忙しくなりやうね。おやすみ」

「また明日」

ベルギオンは家を出て小屋へと入り、横になる。

どうすれば効率よく戦えるかを頭の中で考えてながら。

興味があつたこともあり、一時期そういうことに手を出していた。そのとき何を学んだのかを、ずっと考える。

考えが整理始めた頃、ベルギオンは既にまづらんでいた。

何時しか、完全に眠り込む。

ラグルはシーツに包まり、膝を抱えて丸くなつていた。

顔は少しマシになつたが、まだ熱い。

ベルギオンが戦つといったとき、心臓が跳ね上がるほど嬉しかつた。

（普通にお礼を言おうと思つていたのに、凄く心臓がビビビキつて何もいえなかつた……）

竜人の村には余り本は無いが、それでも子供用の絵本くらいはある。

ラグルはそういうものを今でもたまに読む。

そういうお話では、お姫様の危機に騎士は必ず駆けつけて助けてくれる。

しかしそれがお話の中だけというのも小さい頃から分かっていた。そう思つていたのだ。

自分を大分成熟してゐる、と思つていたラグルにとって、今の状態は想像の外だつた。

ベルギオンが好きなのか？ と自分に問いかけてみるが、違うと思う。

ずっと手に入らなくて、もうダメだと思つたときに向こうから來たような感覚。

ラグルはこんな感情を持つていた自分に驚き、恥ずかしさやどう言つていいのか分からなくなり、家事を放り出して寝室に逃げ込んだのだった。

思い出すだけでも恥ずかしくなり、ぎゅっとシーツをより強く握る。

そうしているとキリアが扉を開け、夕食を持ってきた。

「……姉さん。夕食作ってくれたんですね。ありがとうございます」「いいわよ別に。何時も作つてもらつてるし。ほら、食べなさい」

キリアが食器を置くと、コーンの良い匂いが漂いお腹の虫が鳴る。匂いでお腹が減つていた事を思い出すとは重症だ。

「頂きます」

ラグルはそう咳き、パンをシチューに浸して食べる。

「突然走つていくから驚いたわ。……嬉しかった？」
「はい。私は嬉しかったんだと思います。私を助けてくれた人が、今度は村を助けてくれるって言つて」
「思えばラグルもまだ14か。こういう場面に憧れる年頃ね」「良く考えたら凄く恥ずかしい事をしてました」
「あいつも笑つてたし大丈夫よ。でさ、思い切つたこと聞いていい？」
「惚れた？」
「ぶつ、ちょ、ちょっと姉さんシチューが零れそうになりましたよ！」
「というか吹き出しかけました」

キリアの直球な質問に、思わず女として見せられない絵になるところだつた。

「粗つたもの。で、どうなの？」
「自分でも考えてみましたが、そういう気持ちはありません。カッコいいとは思いますけど、憧れの気持ちのほうが強いと思います」
「精悍な顔はしてるけど、美形じゃないもんねえ」
「そこ等の男よりはカッコいいですよ？ 顔だけ良くて仕方ないですし」

「まあね。明日から忙しくなる。戦う為にね。貴女はビリするの?
今答えられなくて、考えておきなさい」

ラグルは目が良いので、狩猟の時は良く口を使っていた。
多分、この村でも一番上手い。

（でも私は弱い。だから姉さんは考えろって言つてゐるんだ）

きつとどちらでも、ベルギオンとキリアの二人ならビリにかして
しまうかもしない。

それでも、ラグルは守られるだけでは我慢が出来ない。

「私もこの村の一人です。戦います」

そう言つと、キリアははにつ、と笑う。

嬉しいとき、キリアがそう笑つ事を知っていたラグルもそれに釣
られて笑つた。

顔はもう何時も通りだ。

「あいつも寝たし、今日は私達も寝ましょ」

そう言つながら、キリアはシーツを引いて毛布を掘んで横になつ
た。

かと思つとすぐに安らかな寝息が聞こえてくる。

（私も寝よう。姉さん、ベルギオンさん。お休みなさい）

暖かい安心感に包まれて、ラグルも眠りに付いた。

早朝。

本来なら畠仕事などを始める時間に、村人たちが広場に集まっていた。

急ぎで集められたらしく、何事かとざわざわと近くにいる者と話したりしている。

そうしている内に長老が現れ、置かれていた台へと上っていく。

「皆良く集まってくれた。寝ていた所を起こされた者もいるだろうが、何分急ぎの事だったのにな。許して欲しい」

長老が話を始めると、村たちは話を止め、長老の話に耳を傾けた。

「知っている通り、少し前から湖の近くでゴブリンが巣穴を作つておる。

一日ほど前に、ラグルが襲われたのは皆覚えているだろう。

エルフの街に救援を出したが、あちらもゲイル・オーガの群れに手を追われておる

エルフの部隊が来れない事は、分かっていても何人かが暗い顔をする。

「そして昨日、ゴブリンが村の近くまで来たのを確認した者がある」「長老！ それは本当なのか？」

長老の言葉に、先頭にいた壯年の男が堪らず声を荒げた。
その声に長老はゆっくりと頷き、事実だ、と告げる。

「確認したのは、何人かはもう会つた事はあるじゃろ？
ラグルを助け今村に逗留しているベルギオン殿じゃ。

昨日の夜、その報告とともにある提案をされた

「ロティエの家に世話になつている青年か

「確か冒険者よね」

「一体なんだ……？」

ベルギオンの名が出た事で、静まつていたざわめきが再び起つり始める。

ラグルを助けたという事で否定的な意見こそ無いが、提案が何なのか知りたがつていてる様子だった。

「ワシの口で言つより、本人の口で言つた方が分かりやすいだろう。
ベルギオン殿。ここへ。ワシはこの提案は支持してよいと思つて
おる」

そう言つて長老は台から降り、近くに控えていたベルギオンを招いた。

村人の人数は150人ほど。

若者よりやや歳をとつたものの方が多い。

これ程の人数の前で喋つた経験が無かつたので、ベルギオンは思わず睡を飲む。

しかしここまで来て今更引き返す事もできず、気合を入れて台を上る。

「じほん、ん、殆どの人は直接会うのは初めてだと思つ。

今回縁があり、厚意を受けて世話になつてゐるベルギオンだ

村人たちの反応はまちまちだが、多くは先ほどの提案が気になるのか静かになつてゐる。

「本来なら部外者である俺が、このよつたな場に立つのは場違いであるだろうし、もしかしたら村の問題に口をだされ不快に思う人も居るかもしない。

しかしこの村が危険に陥つてると聞いて、世話になつた以上俺は見過ごす事ができない。

俺は昨日、長老にやつ等の殲滅を提案した

「正氣か？ ただのゴブリンだけじゃないんだぞ」

その言葉に、村人たちは様々驚きの声を上げる。
その中でも多かつたのが、そんな事ができるのか、といつ疑問の声だ。

「ロードゴブリンが居る可能性が高いのは知つている。数が多いのもだ。

しかし、ここに居る皆に力を貸してもらえれば、俺は勝機があると考えている」

「何をするつもりなんだ？ 情けない話だが、戦える者は殆ど居ない」

「正面から戦う必要は無い。何人かの話を聞いたが、ゴブリンは雑食だが肉を好む。

そして今森には獣が居ない。だからこそこの村に危険がある訳だが、逆にそれを利用する」

ベルギオンはそう言って、布袋に仕舞つていた罠を取り出して村人たちに見せた。

「確實にこの村に来るのが分かつてゐるなら、罠を仕掛けて徹底的に足を止めて『弓』で一気に仕留めていく。

罠だけでも数を減らせればいいが、威力の高い罠は用意できない。その分數で補う」

「普通のゴブリンなら、確かにそうすれば数が多くてもなんとかなるか……そのまま突つ切つてくるだろうし」

「しかし、強引に抜けてくるやつが居るんじゃないか？」

道全部に罠は張れない、少し迂回されただけでもまずいだろ？」

ベルギオンの言葉に肯定する者、否定する物で意見を交わしていく。

「『弓』を引く者の守りには簡単な柵を作つて、近くに俺とキリアが入るつもりだ。

他にも斧や鎌でいいから何人か居て貰いたいが……。

ゴブリン達を仕留めていけば、必ず長のロードゴブリンが出てくる。

それを『弓』で弱らせて、俺とキリアの一人で討つ」

「それなら……あんたとキリアは危険だが、そのまま戦つより安全に思えるな」

「その分の罠と、矢が足りないんだね？」

「『弓』を引くだけなら俺にもできる。これはいけんんじゃないか？」

否定的な言葉はやがて無くなり、どうすれば良いのかという相談があちらこちらで始まる。

「『弓』で反対があるものは申し出てくれ、俺はこれからやつ等の巣穴を見に行くが、もしかしたら思つた以上に時間が無いかもしだい。

少しでも反対があれば間に合わなくなる可能性がある。矢と罠はまず作らないとどうしようもないからだ」

「いや、やうう。俺たちはずっとこの村で育った。この村が壊されるのも、今更他所へ行くのも止めんだ」

「これでも竜人の血を引いてるんだ。アーブロン達に負けたんじゃ先祖に申し訳が立たないよ…」

反対を申し出る者は居ない。

結局の所、何かをしたかったのだが何をすればいいのかを迷っていた人が多かったのだろう。

「いないうだな……。今回の事で必要な物は長老に紙に書いて渡してある。

本来なら畠や用事の時間を潰す事になる。すまない
「村があつてこそだ。あんたが謝る様な事じゃない」

そう頭を下げるが、若い男はベルギオンを勞う。ベルギオンはそれに対し、もう一度頭を下げた。

台から降り再び長老が台へと上ると一度手を叩き、大きくなり始めた雑談を一度止める。

「皆、静まってくれ。一度解散とする。食事や用意を済ませ、もう一度ここに集まつて欲しい。

仕事を割り振るので。そうじゃ、カルックフとスノーラマはここに来ず、罠を仕掛ける場所を探してくれ。

後でベルギオン殿と相談せねばならん。狩りに慣れたお主なら問題ないだろうが、危険を感じたら引き返すのじゃぞ?」

「おう、任せな」

「罠とは、腕がなるのう

そして、村人たちには朝食や道具を取りに皆家へと戻つていく。カルックフとスノーラマにベルギオンは挨拶し、一人も一旦家へと戻つた。

広場に残つたのはキリアとベルギオンのみ。

ラグルは準備の為先に家へと戻つた。

昨日は様子がおかしかつたが、今日はいつもどおりに戻つてゐる。

「それじゃ行つて来る」

「偵察、私も付いていこゝか?」

「いや、二人だと目立つ。特にキリアは髪が赤いからな。森の中では隠れるのは無理だろ?」

「確かに目立つわね……」

「暇が出来たら。一応村の周りを見ておいてくれ。

来ないとは思うが、様子を見られると厄介かもしけん」

「分かった、気をつけて。武運を祈る。それと、道に迷わないでよ」

キリアはベルギオンの胸をトン、と叩く。

「戦つ事がなによくしたいものだがな」

そう言つてベルギオンは湖の道へと歩き始めた。

村人たちによつて草が抜かれた道を歩いていき、川に差し掛かる。川の大きさは2mと少し。橋を落しても渡りにくいものの、行き来出来ないというほどではない。

流れも穏やかだ。

もう少し時間があれば上流で水門を作つて押しとめ、水の無い溝を歩いてきたやつ等を押し流せたのだが。

作り方から考える必要があるし、諦めるしかないだろ?」

川を渡り、獸道以外道といつ道の無い場所を慎重に歩いていく。十分ほど歩いていると、変化の無かつた風景に違いが出てきた。

（果実や食える植物を殆ど見なくなつたな。根っこをぎ食われているのか）

木などはそのままだが、ここまで良く見かけた食物は視界から消えていく。

ゴブリンたちの活動領域に既に入っているのだ。

足に真剣を集中させて、なるべく音を立てる草や植物を避けて移動していく。

ゴブリンを見かけたら、身を潜めて居なくなるのを待つ。目印としてキリアに教えてもらった大きな枯れ木を見つけ、その近くで目的のゴブリンの巣穴に付いた。

元々は山の一部に出来た洞穴だったと聞いたが、ゴブリン達が住む時に拡充していくのか洞窟のように広がっている。

入り口ではゴブリン達がたむろし、外から帰ってきたやつらは食料を運び込んでいる。

（持ち帰っている食料は少ないな。この分だと既に増えるベースの方が食料の調達より優つてそうだ）

しばらく身を潜めて様子を見てみると、ゴブリン達は籠のような物を背負っているモノの、どいつも半分も集められていない。体長が1mに満たないゴブリン達でも背負えるような籠に、だ。

（さつき通つてきた道を見る限り、川までの食料を食いつぶすのは三日位か？

「うちに村がある」とはもう知っているのだし、肉を求めてくるだろうな。

罠は出来れば明日には仕掛け終わっておきたいか

やがて入り口の「プリンが増え始めたのを見て、ゆっくりとベルギオンは後ろへと下がる。

出来るだけ音を立てないようにひこして、巣穴から離れていく。

（出来ればローデ、プリンを見ておきたかったんだが。あの数に見つかるとまずい）

来た時の道を辿りながら戻つていくと、罠の場所を見に来ていたカルックフとスノラマの一人に出会い。

一人も村へと続く道の食料が食われている事に気付いており、どうするか考えていたようだ。

「川から奥はもう危険です。橋を上げて時間を稼いで、村から川への道で迎え撃つしかない」

小ちい声でそう促す。この一帯はもう罠を仕掛ける間に見つかる危険が高すぎる。

「やつらめ。」と瀆さんといっすれ戻つてくる獣も全部食いつくすな

「好き勝手やつてくれるのう。舐められたものだのう」

壮年の一人は憤りを隠しきれていない様子だ。

しかし経験豊富と長老が言つだけの事はあり、ベルギオンより見事に足音を消していく。

三人はそのまま川の方へと弓を返す。

「橋はもう上げておいた。他に橋は無い。」
「に見張りを立てておけば少數なら大方防げるだろ？」

「だなあ。長老には戻ったとき伝えるかのう？」

「分かりました。手伝います」

橋を渡つた後、三人で橋の端を持ち、川の底にはめ込んだ木を外して、村側の方へ引っ張り上げる。

ゴブリンが無理やり泳いで来た時の為に、一度ばらしておく。

(配置する見張りは弓)の使える人間なら敵を削れて一石二鳥だな)

「さて、戻りながら罠をつける見ておくか」

「まずは落とし穴かのう？ お前さんとキリアの穰ちゃんの二人で掘るんだろ。三つかねえ」

「作りすぎて間に合わなくなつたり、後々困る事もありそうなので、それ位ですね」

三人は周囲を見ながらアレコレと話している。

丁度村へと入る道は緩く坂道となつており、村の入り口を低めの柵で覆えば、かなり一方的に弓で攻撃が可能だ。

落とし穴の目印も弓の届く位置に調節する。

穴の中に杭を仕込む積もりだが、運良く外れて穴を盛つて来たやつは弓の餌食になる。

落とし穴で警戒させて足を鈍らせ、更に落とし穴を避けるとアバサミやくへり罠を踏むように予定していく。

「なるほどな。落とし穴の周囲に別の罠を仕掛けねば、より長く足止め出来るという訳か」

「いや、やり方もあるんだのう」

遠距離武器の射程と罠の組み合せは、元の世界ではゲームだけでなく史実においても重要な要素となっていた。

特に今回は此方が一方的に遠距離で攻撃できる。

数だけでは戦いに勝てない事を、ゴブリン達に叩き込む事になるだろう。

そして村に戻ると、早速総出で木や紐の加工が始まっていた。皆の士気は、とても高い。

村に戻った三人は、見てきた状況を長老に報告する。

「見た所やつ等は、この村に続く道の食料をかなり食い尽くしてます。あの様子なら、三日後にはゴブリン達が動くでしょう」「予想よりも速いですね……、皆は作業を始めておりますでの。調整があれば任せますぞ」

カルックフとスノーラマ、長老と別れ広場の様子を見る。

村の広場では、村人達が準備に忙しく動いていた。
くくり罠に使う紐は手馴れたおばさん達が担当している。
ラグルもそこで手伝っていた。

「どんどん薪持ってきて！ 紐は乾くまで時間が掛かるからじゃん
じゃん煮ていいくよ！」

「分かりました！」

植物の蔓を大量に用意し、皮を剥いで茹である。

茹でた物を干すと縮まって強度が増し、多少のことでは切れなくなる。

石を組んで作つた即席のかまどに火をつけて、大釜に熱湯を沸かし蔓の皮を剥いで入れていく。
茹で上がれば竹で作つた物干しへと干す。
それをひたすら繰り返していく。

「今日中に仕掛けを作り終えるぞ。用意するのは50個だ！」

「こんな量を作るのは初めてだな」

その隣では手先の器用な人たちが、紐をくくりつける仕掛けを編んでいく。

竹を加工して長方形にし、食い込みやすいように下側を尖らせる。仕組みは少し穴を掘った場所に仕掛けを限界まで打ち込み、穴から出ない位まで上に引き抜く。

その後穴を木の枝等で隠す。

対象が踏んだ瞬間に竹と足が穴に入りると仕掛けが作動する。輪になつた紐が引っ張られて、その紐が足を縛つて足止めするのだ。埋まつたとき簡単に抜けないように、弁をつける工夫も行つていた。

少し離れた所で矢を加工しているのは、力のある男たちだ。伐採した木を運び込み、作る矢の大きさに合わせて斧で切り分けていく。

切り分けた木の皮を剥ぎ、薪を割る要領で割つていく。

「一個一個は使えるなら多少雑でもいい。数を用意するんだ」「家畜の羽じや足りんな。確か代用できる葉っぱがあつた筈」

細くなつていけば鉈で割り、1センチ程度になつたらナイフで削つて矢の形に整えていく。仕上がつた物は先を尖らせ矢尻とし、反対側に葉を使って作られた矢羽を取り付けて矢になる。

くぐり罠が終われば、手の空いた者から矢の作成に入る。

この様子なら、三日後にはある程度の数は確保できるだろう。

それらを見た後、弓を使える者を何人か集めて見張りについて話

し合ひ。

見張りにつくものは最低一人。

出来た矢のうち20本を持ち、交代制にした。

ゴブリンは毎日性とのことだが、念の為夜も見張りを立てる」と
にする。

「一匹二匹なら退治するんで?」

「その位なら見張りで対処してもいいが……、大事なのは危険を知
らせる事だ。複数来た時点で引いてくれ」

「分かった。順番はこれでいいんだな?」

もし見張りで対処できない事が起きれば、直ぐに笛を鳴らす事と
した。

その後は罠の仕掛けだ。

くぐり罠がまだ準備できていないので、トラバサミを先に仕掛け
る。

見えないよう、草のある道の脇へ間を空けて仕掛けた。

トラバサミの数は10個。

これに掛かればそれだけで無力化できるだけに、もう少し欲しか
つたが無い物はどうしようもない。

村人が踏まないよう、仕掛けた位置に目印として木を刺しておく。
これからゴブリンを退治するまで、道を行き来するのは見張りと
水汲みの人員だけだ。

徹底すれば問題は無い。

トラバサミが仕掛け終わると、キリアを誘つて一人でシャベルを
持ち、落とし穴を掘り進めて行く。

落とし穴はトラバサミを仕掛けている範囲だ。

作動した後、その穴を迂回する奴がトラバサミに引っかかる。

「どのくらい掘る？」

「余り深くなくていい、ただ入り口を狭めて奥を幅広くする。少しでも上りにくくなるように」

「広くなくていいの？ 一気に数を落せると思うけど」

「広くしそうだと道を塞いでしまうからな。トラバサミも一度きりだし、ルートを変えられるのは不味い」

「そういうものなのね」

入り口が狭いと、手が引っ掛けにくくなり余計に力が必要になる。当然這い上がるのも遅れ、いい的になるだろう。

地面は少し硬いが、少し掘り進めると柔らかくなり、キリアの力もあり順調に掘り進める。

ゴブリンの背丈が80センチ程だった。

1m半程度の深さまで掘り、其処から幅を同じ長さまで広げる。入り口を狭めているので一人しか穴に入れず、一人は掘つて一人は土を引き上げる事で掘り進めた。

余り一度に落せる広さではないが、発動した後も敵にとつては迂回しなければならない障害物になる。

そうしていると毎回には三つとも掘り終わつた。いいペースだ。

穴からキリアが這い出でてくると、二人の姿を交互に見てため息をつく。

全身が汗だくになり、そこに泥がついて体が黒くなつている。

「お互いで口だらけね」

「ずっと穴を掘つていればな」

「気持ち悪いし、一度流したいわ。湯浴みより水浴びがいいな……」

「この後も一緒にやるんだし、一緒に行きましょう」

「おい、冗談は……」

「服は脱がないから一緒にいいでしょ？ 服の汚れは洗わないと無理だけど、体に付いた土汚れは水浴びで十分だし」

「本気か？ 確かに時間は惜しいし、俺もこのままじゃ気持ち悪いのは確かだが」

「ならさっさと行きましょう。ほら」

キリアはベルギオンの背中に回ると勢いよく押してくれる。ベルギオンも流石に折れ、少し経った所で自分の足で歩く。そうして川に移動した二人は川へ入り、体に付いた泥を落す。

「これは気持ちいいな。疲れを忘れそうだ」

火照っていた体が、水の冷たさで一気に冷やされる。更に汚れが落ちていき、清々しい爽快感を味わう。ふとキリアのほうを見ると、着ていた服が肌に張り付いている。透けてはいるものの、体のラインがはっきり現れていた。それを恥ずかしげも無くさらしているキリアを直視できず、なるべく見ないようにベルギオンは顔を洗う。

「そんなそっぽ向かなくてもいいんじゃない」

「あっち向いてるから、服を簡単に洗つて絞つてくれ。それに濡れたままだとしたない」

「分かったわよ。大げさねえ」

そうしてさっぱりとした一人だが、きつちり後でラグルに怒られる事となる。

戻った後は、弓を射る場所に柵を作る。

支柱となる太い木の杭を間を空けて一本打ち込み、そこに釘で板

を打ち込んでいく。

高さは1mで、下から潜れないように間に板を挟む。

食事はラグルが芋で作った団子を摘んだ。

そうしていると、あつという間に時間が過ぎていく。

陽が落ちると共に、作業が一時中断される。

何人かは残つて作業をしたいと言つたが、暗くなつていても作業すれば怪我の元になる。

疲れているときは尚更だつた。

それよりは疲れた体を休め、次の日に備えた方がいい。

そうベルギオンが説得すると、残つた人たちも納得したようで帰宅していった。

「解散か。 それじゃ戻る？」

「いや、少し仮眠をして見張りを変わろつと思つ。 皆見張りは慣れていない筈だ。 疲れてるだろうし」

キリアはそれを聞くと、右手をあごに持つていき何か考えている。

「付き合つわ

数秒ほど考えた後、意外な事をキリアは言った。

「疲れるだろ？」

「それは貴方もでしょ。 」 こちまだ体力に余裕があるくらうよ

「俺は言い出した人間だからな。 それ位はやるぞ」

「だからこそ貴方が倒れると困るのよ。 ましてゴブリンにやられたら、皆士気吹つ飛ぶわよ」

付き合わせるのは悪いと考えたベルギオンは止めよう。しかし、キリアはそれを難なく押しのけた。

「……そうだな、頼む。俺は一度寝てくる

「分かった。私は武器を引っ張り出しておくわ

疲れきった体を引きずり、ラグルに会うと少し経つたら起きてしてくれるよう頼む。

小屋へと入ると汚れた服を脱ぎ捨て、転がるように寝転んだ。次の瞬間にはもう寝入っている。

ラグルに揺られて起こそれ、水で顔を洗つて眠気を振り払つ。三時間ほど寝ていたようだ。

外はもう真っ暗だつた。松明無しでは歩くのも難しい。装備を体に付け、剣を携える。

数日振りに備えた剣は、ずしりと重い。

その重さがしつくりと来る感覚が何とも不思議だつた。

小屋から出ると、キリアが武器を持って待つていた。服は身軽なズボンにシャツを着ている。その上から肘当てや鎧を着込んでいた。いずれも軽い革が使われており、防御よりも動きやすさを重視しているようだ。

キリアの長く赤い髪と合わせて、優雅な雰囲気さえある。そして何よりも目を引くのは、ハルバートと呼ばれる斧槍だ。

(でかいな)

キリアの背の高さは165センチ程。それよりも更に30センチは長い。

槍の穂先に斧頭、その反対側に突起ピックが取り付けられていた。

柄には綺麗な装飾が施され、先端の刃の部分は美しい金属の輝きがある。

一目で見て、見事な業物だと分かつた。

「いい武器だな」

「一応竜人の村に伝わってる秘宝みたいなものかな。

頑丈さは折り紙つき。魔法を真正面から叩き伏せた人も居たらしあいけど、あくまで噂ね」

ラグルはそんな二人に何か言いたそうだったが、気をつけて下さいと見送ってくれた。

一人で連れ添つて、見張りをしている川へと移動する。

「罠を踏まないよう気をつける。くぐり罠はまだ仕掛けでないが、トラバサミはもう仕掛てる」

「分かった。暗いとはいえ、一目じゃ分からぬわね」

落とし穴は今は落ちないように板をしているから問題は無いが、トラバサミに掛かれば怪我で暫くまともに動けなくなってしまう。

見張りの場所にたどり着くと、若者二人が弓を離さないようにしながら火を囲み座つていた。

しかしやはり緊張からか、かなり疲れているように見える。

「見張りを変わらう。弓は借りていいか」

「ああ、あんたか。すまんが頼む。眠つてしまいそうだつた所だ。

弓はまた明日渡してくれたらいい」

「キリアも來てるのか、助かる。弓は俺も置いていく」

若者一人は少し疲れた足取りで村へと戻つていった。

「あんまり弓は得意じやないんだけど。貴方は使える?」

そう言いながらキリアは弓に矢をつがえ、向かい側へと構える。その姿勢は堂に入つていた。

「持つた事はある。当たらなくとも牽制にはなるだろ。俺たちはいざとなれば武器で倒せばいいさ」

「なにそれ。まあ分かりやすいけど」

キリアは弓を置いて焚き火に手をかざした。

弱々しくなつてきた火に、その辺の枯れた木を入れて火を強める。木が火の熱で弾ける音が周囲に響く。

キリアの顔が焚き火で照らされると、その美貌が更に映えた。

「不思議な気分。こんな時間に外でこんな事やつてるなんて」

「俺もこういうことは初めてだな。

今日は来なかつたようだが、明日から小競り合いが始まるとかもしれない」

「不安?」

「心配しているだけだ。見張りは無茶はしないよつて言つてはいるが、一番敵と近いからな」

「なるほどね。明日には罠は仕掛け終わるし、矢も数はまだ少ないけど用意できた。

後は時間との勝負になるのかな」

順調、と言つていい状態だ。

それでも途中何があるかは分からない。

ベルギオンはそう思い、気を更に引き締めるのだった。

偶に何かを話しながら、何事も無く太陽が顔を出し始めて空が白んでいく。

焚き火は既に消していたので少し寒いくらいだ。

しかし意識を常に保つのが難しいほど睡魔がある現状では、その方が助かっている。

キリアは其処まではないが、うつらうつらとしていた。ほぼ一日力仕事をした後に、少し休んで後はずつと起きていたのだ。

意識があるだけでも驚きだらう。

眠つてしまわないように緊張感をなんとか絶えず持ち続け、直ぐ射れる様に『』を手放さない。

そうしてみると、早朝の見張り番が交代にやつてくれる。

「来たぞ。後は任せて寝るといい」

「……頼む。割と限界だ。今日辺りからゴブリン達が顔を出してくると思う。話したとおりに」

「いいから戻れ。あんた目が今にも閉じそうだぞ」

「私も眠い。……眠い」

「ほらキリアも戻れ。帰りに躊躇むなよ」

ベルギオンとキリアは幽鬼のように揺れながら村へと戻る。心配して迎えに来たラグルが、一人の顔をみて少し引いていた。

ラグルの助けもあり無事に家へと辿り着くと、玄関で眠りこけてしまふ。

ラグルの力では寝室まで運べない為、少しだけ引きずつて一人に毛布を掛けた。

「おかえりなさい。お疲れ様でした」

眠る前に見たラグルの顔は、綺麗な笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0576ba/>

ジェネラルの男と竜人の娘～戦いの果て～

2012年1月10日23時47分発行